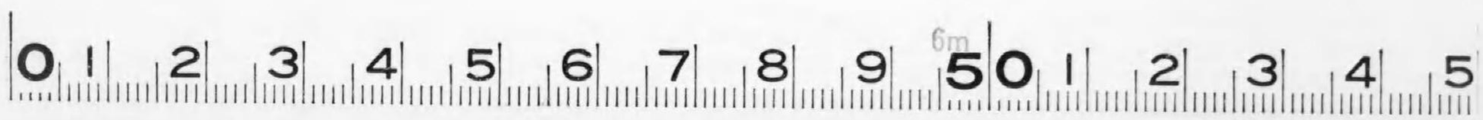

528
116

ト工4V-13

資本主義展開期

農村問題

るけおに

ニコライ・レーニン

大木陽一郎譯

東京

希望閣刊

大9 定4
13.11.20
内交

128-116

譯者序

レーニンがこの書を記した時は、ロシアにおいて農村問題の解決方法についての論爭が高潮に達した時であつて、保守主義、自由主義、社會民主主義の諸々の陣營からも幾多の解決策が提出された。レーニンは一九〇五年革命を挿さむ數年の間、農村問題の研究に沒頭し、純粹にマルクス主義の見地からロシア農村關係を取扱つて、ロシア社會民主黨ボルシエキキの農村政策に基礎を與へた。『ロシア社會民主黨農村綱領』その他の幾多の著作は、この時期における研究の產物であり、こゝに譯出した小册もまた、その時期において記されたものである。

本書はもと一九〇八年に、グラナート百科辭典のために執筆されたものであつて、十九世紀末から廿世紀初頭におけるロシア農村關係を略述したものである。

レーニンは本書において、ロシア農村における資本主義發展の徑路と樣式とを觀

察し、農村における舊土地所有關係の强力的一掃とブルジョア的農村變革との歴史的必然を論證した。

一國における資本主義發展の行程は、その國々によつて特殊な形態を取つて進むものであり、殊に農業の資本主義化はその國獨特の徑路と樣態とを取るものである。日本における農業の資本化、農村における資本主義侵入の行程は、マルクスがイギリスについて、レーニンがロシアについて觀察したと同一の形態を取つてはをらぬ、且つ今後と雖も取ることはできないであらう。しかしながら農村關係の性質は、その國の社會進化の速度と方向との上に重大な作用を及ぼすものであつて、ことに日本のように資本主義の舞臺におくれて乘り出した國にあつては、ロシアおよびドイツにおけるように、農村における經濟關係は、來るべき社會全汎の飛躍的變化の性質を規定するものとして、深甚な注意を拂はれねばならぬ。この意味において日本の農村關係の進化の方向と道程とを測定することが緊要である。

レーニンのこの小冊子は、この點について幾多の貴重なる暗示を與へるだらう。ことに吾々は、この書によつて、日本における農村問題の研究方法並びに觀察方法とについて、多くのものを敎へられるであらう。

原本の標題は知ることができなかつた。この飜譯はベルリン、ゼーホーフ發行、『國際勞働者叢書』第五卷の『十九世紀末ロシアにおける農村問題』(一九二〇年版)を臺本としたが、題名はドイツ譯に倣はずに、『資本主義展開期における農村問題』とした。

尙ほ各節の見出しは、便宜のために譯者が挿入したものである。譯者の註は一括して本文の終りに集めた。

一九二四年五月

大水陽一郎

貨幣及び度量衡換算表

本書中に現はれる貨幣及び度量衡を日本のそれに換算すれば次ぎの如くである

ルーブル	一圓三錢四厘
コペーク	一錢三毛四朱
ヴェルスト	九町四十六間四尺四四
デシャチン	一町一段四歩九三三
エーカー	四段二十四歩一七三
ヘクタール	一町二十五歩
アェトヴェルト	一石一斗六升三合六七
プード	四貫三百六十八匁一三
キログラム	二百六十六匁六六七

序

この論文の目的は、ロシアの農業における國民經濟關係の總體について、簡單な梗概を與へるにある。こういふ種類の著作は、もとより特殊研究の性質を帶びることはできぬ。この種の著作は、たゞ、マルクス主義的諸研究を利用して、ロシア農業における、幾分でも經濟上重要な一切の要素に對して、それぞれ國民經濟上に占むべき位地を示してやり、併せて、ロシアにおける農村關係の一般的發展方向を寫し、最後に、階級鬪爭の中に活躍して、右の發展にとにかく影響を及ぼす諸勢力を發見すべきものである。こういふ見地から、吾々はまづロシアにおける土地所有關係を、ついで地主貴族的および農民的經營を考察し、結論として十九世紀中に行はれた進化の趨勢、並びに、この進化が二十世紀に解決を托した諸問題について、一般的な瞥見を與へたいと思ふ。

目次

一　十九世紀末ロシアの土地所有關係……一

土地所有關係の變化——私有地——分有地——地主貴族的及び農民的土地所有關係——各種土地所有群における土地配分狀態——植民地問題と農村問題

二　地主經營の發展傾向……二四

農奴制經營と資本制經營——賦役より資本主義への過渡としての雇役制——雇役經營と生產力——資本制經營と生產力

三　農民經營の發展傾向……四四

ミール問題——ミール內の土地配分狀態——農民經營における借地の意義——賦役借地と企業借地——土地集中——貧農のプロレタリア化と富農のブルジョア化

四　農村における階級分裂……七三

土地分有の意義の消滅——ミール內の階級分裂——中世的土地所有關係の撤廢——

租税家畜飼養——農具——施肥

五　農業賃銀勞働の發生……九九

家族協業より資本制協業へ——農業賃銀勞働の需要と供給——人口移動——農業大企業の發生——勞働條件

六　農業における資本主義の發展樣式……一二〇

マルクス派とナロードニキ派との論爭中心問題——農村進化の方向——農業に對する市場の影響——農業における資本主義の發展樣式

七　農村變革の必然とその結果……一三八

ロシアの農村危機の性質——農村問題の兩解決策——土地國有策——ストリピン式解決策——プロシヤ式發展とアメリカ式發展——ロシア農村問題解決の任務

譯註……卷末

資本主義展開期における農村問題

一　十九世紀末ロシアの土地所有關係

十九世紀末にかけてのヨーロッパ・ロシアにおける土地所有關係は、最近の一九〇五年の土地統計調査報告（一九〇七年、ペテルスブルグ、統計中央委員會發行）によつて、これを示すことができる。

ヨーロッパ・ロシアにおける土地は、右の調査によれば、全體で三九二・五百萬デシャチンであつた。それは次ぎの主要群に分かれてゐる。

第一群	私有地	一〇一・七（百萬デシャチン）
第二群	分有地	一三八・八（　同　）
第三群	御料地其他	一五四・七（　同　）
總計		三九五、二（　同　）

こゝに注意すべきことは、右の統計は、極北地方、アルハンゲルスク、オロネ

ッ、ウォログダ諸縣における一〇〇百萬デシャチン以上を、御料地の項目の下に入れてゐることである。しかしこゝでは、ヨーロッパ・ロシアの實際に用益される農地を眼目とするのだから、右の御料地の大部分は削除さるべきである。私は『ロシア革命における社會民主黨農村綱領』――これは一九〇七年末に書いたものだが、餘儀ない事情のために出版することができなかつたものである――の中で、ヨーロッパ・ロシアの實際上の農地を約二八〇百萬デシャチンと見積つた。この中に含まれる御料地は、一五〇百萬デシャチンではなく、三九・五百萬デシャチンにすぎぬ。從つて、地主貴族(一)および農民の土地を差引けば、ヨーロッパ・ロシアには、土地總面積の七分一足らずしか殘らぬ。七分六は對抗的二階級の手中にあるわけである。

さてこの二階級の土地所有を觀察しよう。この土地所有は、また身分的に差別ができてゐる。と云ふのは、私有地の最大部分は貴族に屬してをり、これに反し

て、分有地(二)は農民に屬してゐるからである。私有地一〇一・七百萬デシャチンのうち、一五・八百萬デシャチンが會社および協同組合に屬してをり、殘りの八五・九百萬デシャチンが私人の領有となつてゐる。後者は、一九〇五年の社會的身分に分け、且つ一八七七年と照應させれば、次ぎのようになる。

土地所有者の身分	一九〇五年 百萬デシャチン	一九〇五年 %	一八七七年 百萬デシャチン	一八七七年 %	一九〇五年に於ける增減(△印減) 百萬デシャチン	一九〇五年に於ける增減(△印減) 倍數
貴族	五三・二	六一・九	七三・一	七九・九	△一九・九	△一・四〇
僧侶	〇・三	〇・四	〇・二	〇・二	〇・一	一・七四
商人	一二・九	一五・〇	九・八	一〇・七	三・一	一・三〇
小市民	三・八	四・四	一・九	二・一	一・九	一・八五
農民	一三・二	一五・四	五・八	六・三	七・〇	二・二一
その他の諸身分	二・二	二・五	〇・三	〇・三	一・九	八・〇七
ロシア國民以外	〇・三	〇・四	〇・四	〇・五	△〇・一	△一・五二
總計	八五・九	一〇〇・〇	九一・五	一〇〇・〇	△五・六	△一・九二

これによれば、ロシアにおける私有地の大部分は貴族の手にある。貴族には宏大な土地面積が屬してゐる。しかも發展の方向は、貴族の土地所有の減少を指してゐるのである。一定の身分に屬してゐない土地所有が、しかも非常な勢ひで增加してゐる。一八七七—一九〇五年に最も急速に增大したのが「その他の諸身分」の土地所有であり(二十八年間に八倍)、その次ぎが農民の土地所有者である(二倍以上)。從つて農民社會の中で、土地の私有者となる社會的分子が、ますます結晶して行くわけである。これは一般にそうである。やがて吾々は農民的經營の解剖によつて、こういふ結晶を惹きおこす國民經濟の機構を發見するに到るだらう。

こゝではとにかく、ロシアにおける土地私有の發展が、身分的土地所有から非身分的土地所有に向つてゐると確定しておかねばならぬ。十九世紀末には、土地私有財產全體に對して、封建的な、即ち農奴領有權と結びついた土地所有が常に著しく優勢を占めてゐるが、しかも發展の方向は、明白に、ブルジョア的土地私有の形成に向つて進んでゐる。世襲的な土地私有(長子相續等)は死滅しつゝある。明白に金儲けのための土地私有が現はれてゐる。土地の力が死滅して、貨幣の力が發生する。土地はますます商品交換の中に引き入れられる。この論究が進むにつれて、土地は、土地所有關係に關する統計の示すように、今後一層、購買對象物となるのを見るだらう。

十九世紀末にかけてのロシアに、「土地の力」が、即ち賦役地主および貴族地主の中世的土地所有の力が、どんなに强大なものであるかといふことは、面積別による土地所有の分類に關する統計から、特に明瞭に窺ふことができる。統計中央委員會は、特に大私有に關する調査を掲げてゐる。土地所有面積による分類を示せば次ぎの通りである。

土地所有別	所有者數	面積	一所有者當り平均面積
一〇デシャチン以下	四〇九、八六四	一、六二五、二二六デシャチン	三・九デシャチン

一〇—五〇デシヤチン	二〇九、一一九	四、八九一、〇三一	一七、三二六、四九五	二三・四
五〇—五〇〇デシヤチン	一〇六、〇六五	一七、三二六、四九五	一六三・三	
五〇〇—二、〇〇〇デシヤチン	二一、七四八	二〇、五九〇、七〇八	九四七・〇	
二〇〇〇—一〇、〇〇〇デシヤチン	五、三八六	二〇、六〇二、一〇九	三、八二五・〇	
一〇、〇〇〇デシヤチン以上	六九九	二〇、七九八、五〇四	二九、七五四・〇	
五〇〇デシヤチン以上の總計	二七、八三三	六一、九九一、三二一	二、二二七・〇	
ヨーロッパ・ロシア總計	七五二、八八八	八五、八三四、〇七三	一一四・〇	

これによれば土地の小私有は、土地私有の間に全く云ふに足らぬ役目を演じてゐる事が判明する。土地所有者全體の七分六、即ち七五三〇〇〇人のうち六一九〇〇〇人が、總體で六・五百萬デシヤチンを所有してをり、これに反して、巨大地所(ラチフンデウム)(三)は無量の大面積を占めてゐる。即ち七百人の所有者が、各自平均三萬デシヤチンを所有してゐる。まさにこの七百人が、六十萬人の小土地所有者の土地の三倍を所有してゐるわけである。」巨大地所(ラチフンデウム)は一般に、ロシアの土地私有の一得

徴を成すものである。五〇〇デシヤチン以上の土地財產だけを取り離して考へると、二八〇〇〇人の所有者が六二百萬デシヤチン、即ち平均一人當り二二二七デシヤチンを所有してゐるのを見る。從つてこの二八〇〇〇人の手に、私有地全體の四分三があるわけである※。この巨大なラチフンデウムの所有者は、その社會的身分から云へば、主として貴族に屬する。二七八三三人の所有者のうち、一八一〇二人、即ち殆んど三分二が貴族に屬し、貴族は四四、五百萬デシヤチン、即ちラチフンデウムの部類に含まれる土地總面積の七〇%以上を所有してゐるのである。これで見ると、十九世紀末にかけてのロシアでは、全く莫大な土地が——最良の耕地とともに——昔のまゝに(中世通りに)特權貴族の手に、即ち傳統的な賦役地主および地主貴族の手に、集積してゐることが明白である。このラチフンデウムに採用されてゐる經營方法については、後に詳しく述べよう。こゝでは只簡單に、ルバーキン氏もその文獻の中に明記してゐるような、一般に知れ渡つて

ゐる事實、即ち官界の御歴々は、一人も殘らずこの貴族的ラチフンヂウムの所有者の中に入つてゐることだけを指摘しておきたい。

※ 本文の中に一々引用書目を掲げる煩はしさを避けるために、こゝで一括して云つておくが、統計は大部分『社會民主黨農村綱領』および『ロシアにおける資本主義の發達』から引用したものである。

今度は分有土地所有に移らう。所有面積によつて分類されてゐない一・九百萬デシャチンを除いて、殘りの土地面積一三六・九百萬デシャチンが、一二・二五百萬の農家の所有になつてゐる。從つて平均一戸當り一一・一デシャチンである。しかしそれかといつて、分有地が平等に分配されてゐるわけではない、――約半數(一三七百萬デシャチンのうち六四百萬)は、二・一百萬の富裕農家、即ち全體の六分一の手にあるのである。

ヨーロッパ・ロシアにおける分有地の分類表を示せば、次ぎの通りである。

農家群	戸數	デシャチン	平均一戸當りデシャチン
五デシャチン迄	二、八五七、六五〇	九、〇三〇、三三三	三・一
五―八デシャチン	三、三一七、六〇一	二一、七〇六、五五〇	六・三
八デシャチン迄總計	六、一七五、一五一	三〇、七三六、八八三	四・九
八―一五デシャチン	三、九三二、四八五	四二、一八二、九二三	一〇・七
一五―三〇デシャチン	一、五五一、九〇四	三一、二七一、九二二	二〇・一
三〇デシャチン以上	六一七、七一五	三二、六九五、五一〇	五二・九
ヨーロッパ・ロシア總體	一、二二七、三五五	一三六、八八七、二三八	一一・一

これで見れば分有地農家の半數以上――一二・三百萬戸のうち六・二百萬戸――は、八デシャチンまでの農家に屬してゐる。大體において、この土地面積では(ロシア全體を通じて)、一家族を養ふには無條件的に不充分である。この農家の經濟上の狀態が知りたいなら、ロシアで定期的に規則正しく實施されてゐる唯一の統計、即ち陸軍省による馬匹調査によつて、次ぎの狀態を見るがよい。

ドン地方とアルハンゲルスク縣を除くヨーロッパ・ロシア四十八縣で、一八九六—一九〇〇年に一一、一一二、二八七戸の農家について調査が行はれた。そのうち三、二四二、四六二戸、即ち二九・二%は、一頭の馬も所有してゐなかつた。一頭を所有してゐるのが三、三六一、七七八戸、即ち三〇・三%である。馬をもたぬ農民がロシアでどんな慘じめなものであるかは、人のよく知るところである。(勿論こゝでは、平均數を扱つてゐるので、都市郊外の製乳業、莨栽業等を有する例外區域を云つてゐるのではない。) 更に、馬一頭を所有する農民の窮迫と貧困もまた同樣に知れわたつた事實である。この六百萬戸の中に二四—三〇百萬の同居者がある。そして右の家族員の全べてが貧民であり乞食であつて、それぞれ、豆粒ぐらゐの田地のかけらを分配されてゐるのだ。彼等は、それによつては生活できぬが、まさに飢えることだけは間違ひなくできる。今日の事情では、田舍で一家政を營むのに、全体からいつて少くとも一五デシャチンを要するといふ假定が正しいなら

右の最少限度に達しない農家が一千万もあるわけだ。そして彼等全体で、七二・九百萬デシャチンの土地を所有してゐるに過ぎぬ。

分有地所有の考察に當つて、特に重大な一特徴を述べなければならぬ。即ち農民間における分有地の配分狀態は、私有地に比して不平均の度が非常に少ないことである。しかしその代りに、分有地農民の間には、別種の著しい差別、區分、分類が存してゐる、——即ち、幾世紀にわたつて形成されてきた身分的區別である。こういふ區分を明瞭に示すため、まづヨーロッパ・ロシアの一般的調査報告を見よう。一九〇五年の統計は主要農家群を調べてゐるこれによると、以前に一人の賦役地主に屬してゐた農民は、一戸當り平均六・七デシャチンの分有地を所有してゐる。もとの國有地農奴(四)は一二・五デシャチン、もとの莊園農奴(五)は九・五デシャチン、コロニスト(六)は二〇・二デシチャン、チンシエヴイキー農民は三・一デシャチン、レジョーシ農民は五・三デシャチン、バシキールおよびタタール族農

民は二八・三デシャチン、バルト州農民は三六・九デシャチン、コサック人は五二・七デシャチン。すでにこれだけでも、農民の分有地所有が純粋に中世的であることが判明する。今日尙ほ農民間に存在してゐる無數の差別の中に、農奴制度が依然として生き生きと殘つてゐる。

ところが、こういふ箇々の分類は、土地面積によつて區別されるばかりでなく農民の土地買戻條件(七)の程度や、彼等の土地所有權の性質等によつて區別されてゐるのである。ロシア全體に關する一般的調査の代りに、一縣に關する調査を調べて見れば、こういふ分類がどんなものかゞ一目のもとに判明する。一例としてサラトフ縣のゼムストヴォ(八)統計年報を見よう。上記の、ロシア全體に特有の一般的區分の外に、統計者は農民を次ぎのような範疇に分類してゐる。即ち、贈與地農、全農、共有地所有の國有地農、國有地四分一農、もと地主農奴の國有地農、御料地小作人、農民地主、新開農、解放農、免貢農、自由穀作農、もと工場

農奴その他。こういふ複雜極はまる中世的區分が、更に一層甚しくなると、同じ村の農民が、時々、「もと地主甲の農民」、「もと地主乙の農民」といつたように、全然違つた二つの範疇に區分されるまでになる。ロシアの農村關係を、農奴地主制度からブルジョア制度への轉化と云つたように、發展の見地から觀察することのできぬ自由主義ナロードニキ派(九)の著述家は、通例右の事實を閑却してゐる。しかし根本的にいへば、右の事實の意義を充分に評價しないときは、十九世紀におけるロシアの歷史、特にその最近の諸結果——二十世紀初の諸々の出來事——は、絕對に理解できぬものである。國民經濟の主要部門に、中世的諸關係が一歩毎に邪魔をしてゐる場合には、交易が發生し資本主義が發展しつゝある國は、無條件的にあらゆる種類の危機を通過しなければならぬ。有名なミール(一〇)は——その意義は後にも述べるが——農民のプロレタリア化を喰ひ止めるものではなく却つて、右に述べた中世的な諸範疇を發生させて、農民社會を分裂させ、あらゆ

る「存在の理由」を失つた小結合と小區分とに押し込めるものである。

ロシアにおける土地所有關係に關する考察を終はる前に、もう一つ、問題の他の一面に言及しなければならぬ。「上級三万人」の地主貴族と數百万の農家との土地所有面積に關する統計でも、農民の土地所有の中世的分類に關する統計でも、わが農民が、生き生きと維持されてゐる農奴制度の遺物の爲めに、どんなに酷く「縮め」られ、壓迫され、打ち据えられてゐるかを示すには尙ほ不充分である。第一に、地主貴族の爲めを計つた農民收奪（一八六一年の大改革(二)と呼ばれてゐるもの）の後に農民の共有に委ねられた土地は、地主貴族の土地に比べて、ひどく粗惡なものである。このことは、地方的記述の無數の文獻や、ゼムストヴォ統計部の諸研究によつて證明される。これについては、農民地(三)の收獲高が、地主地に較べて尠ないことを示す無數の精確な統計がある。こういふ相違を生ずるのは、第一に農民地の質の粗惡なことに基くものであつて、耕作の粗惡と農民的經

營の貧弱不完全とは、二の次ぎの原因であることは、一般に認められてゐる通りである。第二に、一八六一年の農奴「解放」の際、無數の場合において、農民が地主貴族の餌食になるような具合に、農民地が地主地から切り離されたのである。ロシアのゼムストヴォ統計部は、實に獨特無類の、世界未曾有の種類の地主貴族的農業經營に關する記述で、經濟學の文献を富ましてきた。と云ふのは「切斷された地面を基礎とする」經營、即ちオトイェスキーのことである。農民は一八六一年に、農業經營に缺くべからざる家畜水飲場や草地などから「解放」されたのだ。農民地は地主地によつて四方を取り卷かれるようにされ、こうして地主諸君にとつて、確實無比な——しかも高尙無比な——一つの收入源が保證された。即ち禁斷草地に對する罰金である。「仔鷄(ひよつこ)は一寸でも外へ出せない」と云ふ諺は、悲痛な農民の眞理だ。この「絞首臺上の戲談」は、長々しい引用句にも優つて、統計では表はせぬ農民的土地所有の特質を解き明かすものである。この特質は、その

起原から云つても、地主貴族的經濟の編成方法に對する關係から云つても、生粋の農奴制度であることは、特に云ふ必要もない。

かくて吾々は、ヨーロッパ・ロシアにおける土地所有關係に關する考察の結論に達した。これまでは地主的土地所有關係と農民的土地所有關係とを別々に考察してきたが、今度はこの二つの相互作用を觀察しなければならぬ。そのために吾々は、ヨーロッパ・ロシアにおける土地面積に關する前記の概數——二八〇百萬デシャチンを取つて、この全體の土地集團が、各種の型(タイプ)の土地所有者に、どういふ風に分配されてゐるかを研究しよう。右の各々の型(タイプ)の本質がどんなものであるかは、この論文の進むにつれて追々わかることだが、こゝでは少し急いで、主要型(タイプ)を既に確定したものとして假定して置かう。一戸當り一五デシャチンまでの土地所有者を第一群、即ち——農奴地主のために苦しめられてゐる貧農とする。第二群は、一五—二〇デシャチンを所有する中農。第三群は、二〇—五〇〇デシャ

チンを有する富農(農民ブルジョア)並びに資本家的土地所有者。第四群は、五〇〇デシャチン以上を有するラチフンヂウム農奴地主とする。右の諸群の中に、農民地も地主地も一緒に加へ、少々大ざつぱに分けて※概算すれば、十九世紀末のロシア農業は次ぎの如き狀態を示す。

※ 例へば、ラチフンヂウムの中には、六千二百万デシャチンの地主地、五百十萬デシャチンの莊園地、並びに各々一千デシャチンを所有する二百七十一の商社および産業組合の三百六十萬デシャチンが含まれてゐる。

十九世紀末のヨーロッパ・ロシアの土地所有別

土地所有別	戸數(單位百萬)	デシャチン數(單位百萬)	一戸當りデシャチン數
(イ)農奴地主の搾取に委ねられてゐる貧農	一〇・五	七五・〇	七・〇
(ロ)中農	一・〇	一五・〇	一五・〇
(ハ)農民ブルジョアおよび資本家的農業者	一・五	七〇・〇	四六・七
(ニ)ラチフンヂウム農奴地主	〇・〇三	七〇・〇	二、三三三・〇

右全體にて所有者に分割されてゐない地面……	一三・〇三	二三〇・〇	五〇・〇	一七・六
總計	一三・〇三	二八〇・〇		二一・四

もう一度繰り返して云ふが、こゝに述べた諸群を、經濟的に右のように特徴づけて差支へないことは、この論文の進むにつれて證明されるだらう。右の表（事柄の性質上、當然極く大ざつぱなものに外ならぬ）の細目に對しては批評の餘地があるとしても、細目の批評を以て、事柄そのものゝ否認に代へるわけには行かぬことに注意しなければならぬ。問題の核心は、ロシアの土地所有の一方の極には、七千五百萬デシャチンの土地をもつた一千五十万の農家（同居人數約五千万人）があり、その對極には七千万デシャチンの土地をもつた三万の家族（同居人數約十五万人）が立つてゐるといふ點である。

土地所有關係の題目を終るためには、もう一つ、ヨーロッパ・ロシアの土地所有

の外に、植民の特徴を研究する必要がある。ロシア帝國の土地總面積（フィンランドを除く）の觀念を讀者に與へるために、メルトヴィ氏の統計を利用しよう。一見して分かるように、これを表の形にして、これに一八九七年の調査による人口數を加へよう。

	地面		その中			その中農業に使用し得る土地			一八九七年人口數
	單位千ヴェルスト	單位百萬デシャチン	調査の行はれぬ土地	調査済みの土地	耕地	草地	林地	總計	全體にて（單位千人）一平方ヴェルストに
			百萬デシャチン		百萬デシャチン				
ポーランド十縣	一二・六	一一・六	—		七・四	〇・九	二・五	一〇・八	九四〇二・二
ヴォルガ西部三十八縣	一七五五・六	一八三・〇	—	一八三・〇	九三・六	一八・七	三四・〇	一四六・三	—
ヴォルガ北部及東部十二縣	二四七四・九	二五八・〇	—	二五八・〇	二二・三	七・一	一三二・〇	一六一・四	—
歐露五十縣全體	四三〇・五	四四一・〇	—	四四一・〇	一二三・三	二六・七	一六八・五	三八・五	九三四四二・九
カウカサス	四一・七	四二・九	三・一	二〇・八	六・五	二・三	二・五	一一・三	九六九・四

シベリア	一〇九六六・一	一一四二・六	六三九・七	五〇二・九	四・三	三・九	一二一・〇	一二九・二	五七五八・八	〇・五			
中央アジア	三一四一・六	三三七・三	一五七・四	一六九・九	〇・九	一・六	八・〇	一〇・五	七七四六・七	二・五			
アジア・ロシア全體	一四五一九・四	一五一二・八	八一九・二	六九三・六	一一・七	七・七	一三一・五	一五〇・九	—	—			
全ロシア帝國	一八八六一・五	一九六五・四	八一九・二	一一四六・二	一五五・〇	三四・一	三〇〇・〇	四六九・四	一二五六四〇・〇	六・七			

ロシアの邊境地域について、吾人の知つてゐる範圍が如何に貧弱であるかは、右の數字によつて明かである。ロシア內地の土地問題を、邊境地域への移住によつて「解決」しようと欲するのは、たしかに無分別極はまることに相違ない。疑ひもなくこの種の「解決」は、山師だけが提議し得ることである。前に述べた舊ラチフンヂウムと、新生活條件並びに新經濟條件との矛盾は、ヨーロッパ・ロシアにとつては、その境界內で、或る種の變革によつて解決され得るのであつて、その境界外で解決され得るものではない。移住によつて農民は農奴制度から解放されるものでなく、事實は、ロシア中央部における農村問題と植民の農村問題とは、同一基礎の上にあるものである。從つて問題は、ヨーロッパ・ロシアにおける危機を、植民問題によつて暈かすことでなく、中央部と邊境地域との兩者に對して、農奴地主制ラチフンヂウムの有害な諸結果を指摘することが肝心のことである。ロシア中央部における農奴制度の遺物が、ロシアの植民を抑制してゐるのだ。ロシアの植民を盛んにし、これを順路に導くには、ヨーロッパ・ロシアにおける農村變革と、農奴制度の桎梏からの農民の解放とによる外はない。こういふ風に植民を整調することは、移住のための官僚的な「斡旋」や、自由主義ナロードニキ派の文筆の士が口癖にしてゐる「移民協會」などによつて行はれるものではなく、ロシア農民を無知と奴隸根性と野蠻性とに縛りつけ、ラチフンヂウム所有者への永久の賦役に縛りつけてゐる、一切の條件および諸關係を取りのぞくことによつて行はれ得るのである。

メルトヴィ氏がプロコボキッチ氏と共著の小册子(『ロシアにどれだけの土地があり、どれだけの土地が利用されてゐるか!』モスコー、一九〇七年)の中で、耕作の進歩によつて今まで使用に適しなかつた土地が、用益されるようになることを指摘したのは、きはめて正當な見解である。曰く、學士院會員で且つこの方面の大家、ベルグおよびヘルマーソンは、一八四五年に、タウリード地方のステップは「氣候と乾燥との關係上、永久に最劣等の不毛地に屬するだらう」と書いたが、當時は、タウリード縣の人口は、百八十万チェトヴェルトの穀類を產出してゐた。ところがその後六十年間に人口は二倍になつたが、現在の穀類の產出高は千七百六十万チェトヴェルト、即ち約十倍に上つてゐると。

たしかにこれは、きはめて正鵠を得た研究ではあるが、たゞ一つ、メルトヴィ氏は大事なことを忘れてゐる。即ち、新ロシアの植民を可能ならしめた主要條件は、ロシア中央部における農奴制度の廢止だといふことである。中央部における

變革のみが、南部を急速に、大規模に、アメリカ式に植民し、これを產業化することを可能ならしめた(南ロシアのアメリカ式急發達については、一八六一年以來夥しい記述がある)。現在においてもまた、ヨーロッパ・ロシアにおける變革のみが、即ちこの地に依然として現存する農奴制度の遺物を完全に除去し、農民を中世的ラチフンヂウムから解放することのみが、現實的に植民の新紀元を開き得るものである。植民問題は、ロシア內地における農村問題にくらべれば、一の副次的問題である。十九世紀末において吾々は、次ぎの二つのいづれかを擇ぶべき位置にある。即ち、『原』ロシア諸縣における農奴地主制度を完全に清算するか、——その結果は、邊境地域の植民の急速な大規模な、アメリカ式の發展となるだろう。それとも、中央部における農村問題の解決を延期するか、——その結果は必然的に生產力の發展が永く抑へつけられ、不可避的に農奴地主制度の因襲が植事情にも移植されることになるだろう。

二　地主經營の發展傾向

地主貴族的經營組織の主要特徴は、資本制度(「自由賃銀勞働」)と雇役制度(二)との結合に存することは一般に人の知れるところである。さて雇役とは何か？

この問題に答へるには、農奴制度時代における地主貴族的經營組織を一瞥しなければならぬ。法律的及び行政的見地から見た農奴制度が如何なるものであり、また農奴制度の下に、どんな生活狀態が支配してゐたかといふことは知れわたつてゐるが、農奴制度の場合、地主及び農民間の經濟關係の中心點が奈邊にあつたかといふ疑問は、ほとんど提出されてをらぬ。地主貴族は農民に土地を配賦してゐた。時折りは、その他の生產要具、たとへば林地や家畜などをも貸與した。そこで、農奴に地主地が配賦されてゐたといふことには、どんな意味が含まれてゐたか？　この配賦は、今日の事情に相應した言葉で云ひあらはせば、まさに當時の

賃銀の形態だつたのである。「資本制生產の場合は、勞働者には貨幣で賃銀が支拂はれる。」資本家の利得もまた貨幣に實現され、工場において一勞働行程內で、或は一勞働日その他で狙はれる剩餘勞働（ふところ手をした資本家に剩餘價値を保證する勞働）もまた貨幣に實現される。」ところが賦役經濟の場合はこれと異る。剩餘勞働は奴隸經濟にも存在してゐたように、賦役經濟の場合にも必然的に存在する。しかしこの兩種の勞働は、時間的及び空間的に分離してゐるのである。農奴は主人のために三日働らき、自分のために三日働らく。主人のためには地主地または穀倉で働らく。自分のためには配賦された土地で働らいて、自分自身と自分の家族のための衣食――それは地主が農奴の勞働力を維持するために、必然的に彼に與へねばならぬもの――を獲得するのである。

從つて「農奴地主制度及び賦役制度は、資本制度と次ぎの點で一致する。即ちいづれの場合も、勞働者は、生活維持に必要な勞働の生產物だけを受取り、剩餘勞働

の生産物は、生産手段の所有者に無償で交附しなければならぬといふ點である。たゞ農奴地主經營組織は、資本家經營組織と、次ぎの三つの點で區別される。第一に、農奴地主經營は自然經濟であるに對して、資本家經營は貨幣經濟である。第二に、農奴地主經營の場合は、土地の配賦で勞働者を土地に縛りつけることによつて搾取が行はれるが、資本家經營の場合は、勞働者は土地から「解放」される。農奴地主が收入を狙ふためには、土地の分け前と農具及び家畜とを所有する農民を、自分の土地に持つてゐなければならぬ。土地も馬も經營も持たぬ農民は、農奴地主の搾取のためには無用のものである。これに反して、資本家が收入(利得)を狙ふためには、土地と經營とを持たぬ勞働者をこそ必要とする。即ち、自己の勞働力を自由勞働市場で賣ることを餘儀なくされるところの勞働者が必要なのである。第三に、農民は土地を配賦された場合には、地主に人身的に隷屬しなければならぬ。何故なら彼は、土地を自由にし得るときは、たゞ強制される場合にのみ主人の爲めに働らくからである。こゝに「經濟的必要」に基かないで、農奴地主の強制や、法律的隷屬や、權利の不平等などに基く一の經營制度が現はれる。これに反して「理想的」な資本主義とは、生産手段の所有者とプロレタリアとの兩方にとつての、市場における最完全の契約の自由である。

農奴地主經營の、又は同じことだが、賦役經營の、經濟事情を明白に理解しさへすれば、雇役制度の意義と歴史上におけるその位置とを了解することができる。雇役は、賦役から資本制度への過渡である。雇役の本質は、農民が地主の土地を農民自身の農具を以て耕作し、その代償として一部分は貨幣で、一部分は現物で(即ち土地を以て、或は分離農場の耕作の場合における補償や、或は牧草地や冬期のための前貸等で)支拂はれる點に存する。イスボルシュチナといふ名で知られてゐる經營形式は、種々の雇役形式の一つである。雇役を基礎とする地主經營の場合は、農民は、粗末なものではあつても家畜と農具とを伴つた土地を、無條件

的に分與されねばならぬ。その上にこの農民は、賦役をする位に困窮してゐなければならぬ。この場合地主は、貨幣と生產裝置全體とを自由にする企業家および資本家として現はれずに、附近の農民の困窮を利用して、彼れの勞働を三倍も安い價格で手に入れる高利貸として現はれる。

このことを明瞭にするために農務省の統計に據らう。この資料は、地主諸君が偏見的に抱いてゐる一切の疑念を拂ふに充分なものである。有名な出版物『農業における自由賃銀勞働』は、黑壤帶に關する八ヶ年間の平均統計をかゝげてゐる。これによれば、自家農具を以てする、冬季作一デシャチンの雇役に對する平均賃銀は六ルーブルと見做さねばならぬ。しかしこの勞働の價値を自由賃銀勞働者の場合として算定すれば——右の統計によれば——人間の勞働だけで六ルーブル一九コペークとなり、馬の勞働はまた別に最低限四ルーブル五〇コペークと算定せられる(前掲書四五ページ、『資本主義の發達』、一四一ページ)。從つて自由賃銀勞

働の場合は一〇ルーブル六五コペークに上るが、雇役の場合は僅か六ルーブルに過ぎぬ。このことは偶然の現象ではなく、いたるところに且つ普通一般に見受けられることであるが、一体こういふ現象は如何に說明すべきであらうか? 「賦役」、「高利」、「詐欺」といふような言葉は、業務(ビジネス)の形式と性質とを示すものであつて、業務(ビジネス)の經濟的本質を說明するものではない。如何にして農民が、一〇ルーブル六五コペークの價値ある勞働を六ルーブルで一年中働らくことができるのか? 農民がこうすることができるのは、分與地が生計の一部を充たすに過ぎない結果賃銀を「自由賃銀勞働に尋常の」規準以下に引きさげることを許すからである。また農民がこうすることを餘儀なくされるのは、彼れ自身の耕作だけでは生活ができず、貧弱な分與地が彼れを附近の地主に義務づけるからである。いふまでもなく、こういふ現象は、賦役制度が資本制度に取つて代られる行程の一部としてのみ、「尋常」なものと見做すことができる。蓋し農民社會は、こういふ條件の下に

不可避的に崩解して、徐々に併し確實に、プロレタリアの列に引き落されるからである。

サラトフ郡に關する統計は、地方的に制限されたものではあるが完備したものである。この統計によれば、收穫、納庫、打禾の一デシャチンの勞役に對する平均賃銀は、冬季作の場合には九・六ルーブルに當り、その際賃銀の八〇―一〇〇%は先拂ひされる。一農圃の借地のための雇役は九・四ルーブルにつくが、自由賃銀勞働は一七・五ルーブル！ 收穫および納庫に對する報酬は、雇役の場合は一デシャチンに付き三・八ルーブルの勘定になるが、自由賃銀勞働の場合は八・五ルーブルにつく。およそ右の數字のそれぞれは、農民の無限の困窮、苦役、悲慘に關する長々しい報告書にも優さるものである。この各々の數字は、十九世紀末のロシアには、依然として農奴地主的搾取と賦役制度の遺物とが、如何に活潑に維持されてゐたかを證するものである。

雇役制度の分布狀態を調べることは極はめて困難である。一般に地主農場にはそれぞれの農業上の操作に應じて、雇役制度と資本制度とが並用されてゐるのが普通である。土地の大部分は農民に賃貸され、その代償として農民は雇役しなければならぬ。このことは、カウフマン氏の詳細な著作※中の私人農業經營に關する一圃の最新の統計によつて明かである。ツーラ縣では（この統計は一八九七―九八年に係はる）「地主は舊式の三圃農業を墨守し、廣汎な土地が農民によつて耕作されてゐる。」 地主地の耕作は極度に不充分である。クルスク縣では「一切の土地が農民に一デシャチンづゝ――そうした方が收入の點で有利だつたから――すつかり委讓されてしまつた。」ウォロネーシュ縣では、中小土地所有者の「大部分は農民を雇つて、農民自身の農具を以て耕作せしめてゐるか、又は所有地を賃貸してゐる……その大多數の場合、どんな少しの改良も行はれないので有名な一つの方法で經營されてゐる。」

※ 『農村問題』、ドルゴルコフ及びペートルンケ共ッチ編輯。第二卷。モスコー、一九〇七年。

右の記述によつて、十九世紀末にかけてのロシア諸縣の特徴は、雇役制度または資本制度の優勢にあると見做して差支へない。このことはアンネンスキー氏がその著『収獲の影響云々……』の中で承認してゐる通りである。氏の分類方法を表の形で示せば、

	縣數 黑壤帶	縣數 普通耕土帶	縣數 合計	土地私有者植付總面積（一千デシャチン）
一、資本制度が優勢を占むる縣	九	一〇	一九	七、四〇七
二、兩制度が同程度に並存する縣	三	四	七	二、二二二
三、雇役制度が優勢を占むる縣	一二	五	一七	六、二八一
總計	二四	一九	四三	一、五九一〇

これによれば雇役制度は、黑壤帶では決定的に優勢を占めてゐるが、前表における四十三縣全體で見れば第二位である。尙ほ、右表の第一類（資本制度の諸縣）

の中には、バルト諸縣、西南諸縣（甜菜栽培地方）、南部諸縣、兩首府を含む諸縣のような、農業を營む中央部と特色を異にする諸地方が算入されてゐることに注意する必要がある。

雇役制度が農業における生產力の發展に及ぼす影響については、カウフマン氏の前掲書中の資料が明白に物語つてゐる。そこにはこう書いてある。「農業の進歩を最も阻害する原因の一は、農民の小作とイスポルシュチナとであることは疑ひを容れぬ……。」つゞいて氏は、ボルタワ縣における農業經濟を概觀して、「借地農は田地を粗末に耕やし、粗惡な種子を蒔き、蒔いた種子を滅茶々々にしてゐる」と指摘してゐる。モーギレフ縣（一八九八年）では、「普通一般の經營形式が缺けてゐるために、どんな改良も甲斐がない。」スコブシュチナは、「ドニエプル郡における農業が、新しい試みや改良を夢想することもできないような狀態にある」主因の一である。「右の資料は」とカウフマン氏は記してゐる、「同一の地所において、

小作地では時代おくれの舊い經營形式が維持されてをり、一方、所有者自身によつて耕作されてゐる土地では、既に新式の完全な耕作制度が實施されてゐる事を示す屈強の證據である。」かくて例へば、小作地では依然として三圃農業が、しかも屢々施肥なしで行はれてをり、一方、地主農經營の場合では、輪栽農業が實施されてゐる。イスポルシュチナは飼料作物の栽培を阻み、施肥の發達を害し、新式農具の使用を妨げてゐる。こういふ經營の結果がどんなものかといふことは、收獲に關する統計によつて明瞭である。例へばシンビルスク縣の一ラチフンヂウムでは、地主農經營の場合は、一デシャチンに付き裸麥の收獲が九〇プード、小麥が六〇プード、大麥が七四プードであるのに、イスポルシュチナ制度の田地では各々、五八、二八、五〇プードである。或る一郡（ニジニ・ノヴゴロド縣ガルバトフ郡）に關する統計は左の通りである。

一デシャチン當リ裸麥收獲（プード）

土地所有者群	分有地	地主農經營地	イスポルシュチナ	借地
第一群……	六二	七四	—	四四
第二群……	五五	六三	四九	—
第三群……	五一	六〇	五〇	四二
第四群……	四八	六九	六一	四一
平均	五四※	六六	五〇	四五※

※この兩つの數字は、カウフマン氏の原文に誤植があるため、正當なものではない。

これで見れば、農奴地主的方法（イスポルシュチナ及び細小作）で經營されてゐる地主貴族地は分有地に比して收獲が尠ない！この事實は非常に重大なものである。蓋しそれは、ロシアの農業の停滯の第一の且つ最重要の原因、即ちロシアの國民經濟全體の無進歩と世界無比の農民の悲慘とは、農奴制度の直接の遺物た

る雇役制度に存することを、明白に證據立てるものだからである。農奴地主的のラチフンヂウム、因襲、全經濟制度が作用する壓力が存立する限りは、信用制度も農事改良も農民「保護」も、または官僚および自由主義者お得意の「有効な扶助」政策も、何等眞面目な効果を擧げることはできぬ。これに反して、一の變革が地主貴族的土地所有を滅ぼし、中世的ミールを破壞するなら（倒へば土地を國有にしても、警察的な方策や官僚的な方策を以てしては、決してミールを破壞するものではない）、それは明白により急速な、現實的により大規模な進歩のための土臺となるに極まつてゐる。イスポルシュチナや賃貸の場合の土地の收獲が、信じられぬほど貧弱なのは、雇役制度――「旦那樣のため」――が原因だ。今日からでも農民が「旦那樣のため」の勞働から解放されるなら、その土地の收獲高が增すばかりでなく、分有地の收獲高もまた增加する。しかも、農業經濟から農奴地主制度の障碍物が取り除かれたといふ、只一事のためだけで增加するのである。

現在の事態から見れば、結局は農業私人經營に一進歩が現はれるのだが、しかしこの進歩は非常に緩漫に行はれるために、ロシアは永らくの間、政治的に且つ社會的に、「野蠻な地主」の支配の絆の下に置かれるだらう。この進歩が奈邊に現はれてゐるかを研究し、そこから生ずる二三の一般的結果を探究して見たい。

地主農經營の、即ち資本主義的に經營される地主地の收穫高が農民地のそれに比して大であることは、資本主義が農業經營に技術的進歩をもたらしたことを示すものである。この進歩は、雇役制度の自由賃銀勞働への推移と並行する。農民社會が貧化して馬と農具とを失ひ、農業主がプロレタリア化する結果、地主貴族は自分自身の農具を以てする勞働に移ることを餘儀なくされる。農業における機械の使用が增加して、生產力を高め、不可避的に純資本制生產關係に導く。一八六九年から一八七二年の間に、外國からロシアに七八八〇〇〇ルーブルの農業機械が輸入されたが、一八七三―一八八〇年には二・九百萬ルーブル、一八八一―一

八八八年には四・二百万ルーブル、一八八九—一八九六年には三・七百萬ルーブル一九〇二—一九〇三年には一五・二——二〇・六百萬ルーブル。

ロシア内における農業機械の生産は次ぎの數字を示してゐる（職場及び工場の大ざつぱな統計によつて概數を示す）。一八七六年には二・三百萬ルーブル、一八九四年には九・四百萬ルーブル、一九〇〇—一九〇二年には一二・一百萬ルーブル。これらの數字は、農業における一の進歩、特に資本主義的進歩を現はしてゐることは否まれない。しかし同時に、この進歩は、近代的資本主義國家において可能であるところのもの——アメリカはその例——に較らべて、非常に緩漫に進行してゐることもまた否むことができぬ。一九〇〇年六月一日の調査によれば、合衆國では八三六・六百萬エーカーが農業企業家（ファーマー）の所有であつた、即ち約三二四百萬デシャチンである。農場數は五七〇萬だつたから、平均一農場は一四六・二エーカー（約六〇デシャチン）となる。これらのファーマーに對して、一九〇〇年には

一五七・七百萬ドルの農業機具類が生産された（一八九〇年には一四五・三百萬ドル、一八八〇年には六二・一百萬ドル※）。右の數字にくらべれば、ロシアの數字は滑稽な程小さい。即ちそれは、農奴地主的ラチフンヂウムがわが國では強大だからである。

※ 一九〇〇年、第十二回人口調査。第三版。ワシントン、一九〇四年。二一七—三〇二ページ、具。

地主農と農民とにおける改良農具の分布狀態の比較については、十九世紀九十年代の中葉に行はれた農務省の持別調査によつて知ることができる。この調査をカウフマン氏が精密に再掲してゐるものから表の形で拔萃すれば、

改良農具分布百分率

地域	地主農	農民
中央部農耕地方……	二〇—五一	八—二〇

中部ヴォルガ地方	一八—六六	一四
新ロシア	五〇—九一	三三—六五
白ロシア	五四—八六	一七—四一
海岸地方	二四—四七	一—二一
※	二二—五一	一〇—二六
工業地方	四—八	二

※ この飜譯の基本となつてゐるベルリン版ドイツ譯書には、この項目に文字が脱けてゐる(譯者)。

右の全區域を平均すれば、地主農側には四二%、農民側には二一%となる。

同樣に、施肥の分布に關する總計を見ても、「地主農は常に進歩してをり、今日のところ遙かに農民に先んじてゐる」(カウフマン、五四ページ)。そればかりでなく、農村改革時代のロシアでは、地主が農民の肥料を買ひ取ることが普通一般の現象だつた。これは農民が極貧狀態にあつた結果である。現在ではこういふことは止んだ。

最後に、飼料作物の栽培の分布に關しても、精密な且つ廣汎な統計がある。これは同時に、地主經營と農民經營との農業技術の程度の判斷にも役立つものである(カウフマン、五六一ページ)。

主要特徴は左の通りである。

ヨーロッパ・ロシアにおける飼料作物植付面積(單位千デシャチン)

	農民	地主農
一八八一年	四九・八	四九一・六
一九〇一年	四九九・〇	一、〇四六・〇

地主經營と農民經營の間にある、こういふ差別の結果は何であるか? それは收穫に關する統計だけによつて判斷ができる。ヨーロッパ・ロシアは十八年間(一八八三—一九〇〇年)に、平均次ぎの收穫を見た(チェトヴェルトで示す)。

	裸麥	冬作小麥	夏作小麥	燕麥
地主農……	六・〇	五・七五	五・〇	八・五
農民……	五・〇	五・〇	四・二五	七・〇
差異……	一六・七%	一三・〇%	一五・〇%	一七・六%

カウフマン氏が、右の差異は「大したものではない」と云つたのは全然正當である。しかし、この場合注意すべきことは、農民が一八六一年に粗惡な土地だけを與へられたといふことの外に、農民社會全体として見做された右の平均の裡には、後に述べるように、一層大きな差異が隱されてゐるといふ點である。

地主經營の考察から、次ぎの一般的な結論を引きだすことができる。曰く、資本主義は明瞭に進行してゐる。賦役勞働を基礎とする經營は、自由賃銀勞働を基礎とする經營に變化しつゝある。賦役勞働を基礎とする經營並びに小農經營に對して、資本主義的經營の農業の技術的進歩は、あらゆる點において明瞭 認める

ことができる。とは云へこの進歩は、近代的資本主義國から見れば、信じられないほど緩漫に進んでゐる。そして十九世紀末のロシアには、次ぎの兩者が鋭い矛盾となつて對立してゐる。即ち、一方には、總體的な社會的發展の切迫、他方には、農奴地主制度。——而してこの後者こそは、地主貴族的ラチフンヂウム所有並びに雇役制度となつて現はれて、經濟的進歩を抑止し、ロシアの公共生活における壓制、蠻行、約言すれば韃靼人精神の無數の形態の泉となつてゐるものである。

三　農民經營の發展傾向

農民的經營は、ロシアにおける今日の農村問題の中心點に立つものである。農民的土地所有關係は、既に述べた通りである。今度は農民的經營組織、しかも技術的な意味でなく、政治的經濟的の意味での組織を觀察しなければならぬ。

第一に、この場合、ミールの問題に當面する。この問題については極はめて豐富な文獻があり、今日勢力ある社會思想中のナロードニキ派は、主として、この「一切を平等化する」制度物の民族的特性の上に、自己の世界觀を築き上げてゐる。尙ほ特に注意すべきことは、ロシアの土地共同體に關する文獻中には、問題の二つの異つた方面が絕えず混合し、錯綜してゐるといふ點である。即ち、一方には、ミールの農業術と、並びにそれと結びついてゐる風習慣行との狀態、他方には、ミールの政治的經濟的地位。ミールに關する著作の大多數の中には（オルロフ、トゥゴロフ、カイスラー、W・W氏）、問題の第一の方面が注意深く手廣く取扱はれてあるあまり、第二の方面は完全に忘却されてゐる。こういふ取扱方法は大變に間違つてゐる。ロシアの土地關係が一種獨特なものであり、他國のそれとは違つてゐることは疑を容れぬ。しかしおよそ資本主義國と云はれる資本主義國の中で、その農業や、土地關係の歷史や、土地所有の形式や、土地用益の方法等が、全く同一の國は二つとありはしない。そこで、ロシアの土地共同體の問題を重大にしたものは、――十九世紀の後半以來、わが國に優勢を占めてゐる社界思想の兩つの主要方向、即ちナロードニキ派とマルクス派とが、この點で分れたほどの重要なものであるが、――それは共同體の農業術とその風習慣行とに關する方面ではないのである。

しかしミールの內部に、どんな農民の型（タイプ）が徐々に形成されてゐるか、如何にこの型（タイプ）が發展してゐるか、雇傭主と被傭者との間、富裕者と貧困者との間、即ち經

營を改善し技術的にこれを完全なものにする者と、經營を放棄して村を出てゆく者との間に、どんな關係が生じたかといふ問題を、土地割替、技術等の相違に關する説明によつて暈かしてしまふことは、どんな場合でも、經濟學著述家にとつてふさはしからぬことである。ロシアの國民經濟研究にとつて、貴重な資料を發表したわがゼムストヴォ統計家は、疑ひもなく右の眞理を意識してゐた。そして右の統計家が、十九世紀八十年代に、土地の分け前によつて、並びに田地に働らく人間の登錄數または實數によつて、農民を分類する御役所のやり口をすてゝ、農家の經營上の富裕狀態によつて分類する、唯一の科學的に正しい方法に移つたのは、まさにこのためである。たとへば、ロシアの經濟狀態を探究する興味が特に盛んだつた當時に、W・W氏のような、この問題に關してあのように「黨派的」な著述家ですら、「ゼムストヴォ統計部の發表の新型式」を心の底から賞讃し(『北方の使者』、一八八五年、第十一號所載W・W氏社說)、「統計は、農民社會の種々

雜多の經濟群の總體——農村またはミールといふような——を對象とせずに、經濟群そのものを對象とせねばならぬ」と說いた程である。

ミールに特別の意義を附與する主要特質として、ナロードニキの眼に映ずるものは、均等の土地用益である。そこで吾々は、ミールが如何にしてこういふ平等分割を保存してゐるかといふ、その「如何にして」の問題を、しばらく問題外において、まづ經濟的事實に、即ちこの平等分割の結果に向つて歩を進めよう。ヨーロッパ・ロシアにおける分有地全體の配分は、精密な統計によつて既に證明したように、決して均等に行はれてはをらぬ。

諸々の農家群の間や、各種農村の農民間に行はれてゐる土地の配分、否、一つの村における各種地主に所屬する農民間の配分すらも、平等分割とは似てもつかぬものである。たゞ小ミール內においてのみ、土地割替の仕掛けによつて、この小さな閉鎖的組合に、土地の均等所有が行はれてゐるに過ぎぬ。こゝで一度、農

家における分有地の配分に關するゼムストヴォ統計を一瞥しよう。この場合、いふまでもなく、家族の大きさ又は勞働者の數によらずに、各農家の經營上の富裕狀態(植付面積、耕畜數、乳畜數等)を基礎とする分類法を採らなければならぬ。何故なら、小農經營における資本主義的進化の本質は、家長制團體の內部に財產の不平等を造り出し、これを增大し、更に進んでは、單なる不平等を資本主義的關係に變形することに存するからである。從つて、農民社會內の經濟狀態の特殊な相異を計算に入れないなら、近代的の經濟的進化の一切の特殊性を見落したことになるのである。

初めに、一の典型的な地區について述べ、次いでこれを一般化して、全ロシアの農民社會に關する興味ある結論となし得る理由を述べよう。資料は『資本主義の發達』第二章から引用する。

農民の土地所有が、專らミールを通じて行はれてゐるペルム縣クラスノウフィ

ムスク郡では、分有地は、次ぎの如く配分されてゐる。

一農家當りの	家族員數	分有地デシヤチン數
休耕	三・五	九・八
五デシヤチン迄の耕作	四・五	一二・九
五—一〇デシヤチン	五・四	一七・四
一〇—二〇デシヤチン	六・七	二一・三
二〇—五〇デシヤチン	七・九	二八・八
五〇デシヤチン以上	八・二	四四・六
平均	五・五	一七・四

これによれば、農家の經濟的地位と家族員數とは並行してゐることを知る。見澤山は農民の富裕の原因の一であることは明白だ。これは疑ひのないことだ。た

ゝこの富裕狀態が、わが國の國民經濟の現狀に照らして、如何なる國民經濟關係に導くかゝ疑問であるだけである。分有地に關しては、非常に不平等ではないが、とにかく平等には分配されてゐないのを見る。一農家が富裕であるほど、家族員當りの分有地面積が多い。最下級の農家群では、家族員當りの分有地は三デシャチンに足らないが、次ぎの群では、約三デシャチン、その次ぎが約四デシャチン、最後に最上級の農家群では五デシャチン以上である。從つて兒澤山と分有地を豐富に支給されてゐることとは、農民社會の中の極少數者の富裕の基礎である。何故なら、兩つの最上級群は、農家總數の僅か十分一を占むるに過ぎぬからである。農家數と、その家族員數と、分有地の配分との關係を百分率で示せば次ぎの數字となる。

農家群	農家數（百分率）	一戸當り人員數（百分率）	分有地面積（百分率）
休耕	一〇・二	六・五	五・七
五デシャチン迄の耕作	三〇・三	二四・八	二二・六
五―一〇デシャチン	二七・〇	二六・七	二六・〇
一〇―二〇デシャチン	二二・四	二七・三	二八・二
二〇―五〇デシャチン	九・四	一三・五	一五・五
五〇デシャチン以上	〇・七	一・二	一・九
總計	一〇〇%	一〇〇%	一〇〇%

右の數字から、分有地の配分には、或る一定の比率が存することが判明する。この比率を吾々は、ミールの平等分割の結果だと思ひ込んでゐるのである。各々の農家群において、家族員と分有地とのプロセント數は、そんなに懸隔してはをらぬ。しかしこゝにもまた、個々の農家の經營上の富裕狀態が支配してゐる。即

ち、下級群では、土地の百分率が家族員の百分率の下位にあり、これに反して上級群では上位にある。この現象はその場限りのものでなく、また一地區だけにあて嵌まるものではなく、一般にロシア全體に適用されるものである。前掲の自著(『資本主義の發達』)において、私は、ロシアの各地方から撰んだ七縣二十一郡に關する同種の資料をかゝげておいた。この五十萬戸の農家を包含する統計は、いたるところに同一の關係を示してゐる。全体の二〇%を占めてゐる富裕農家は、全体の二六・一—三〇・三%の家族員數、二九—三六・七%の分有地面積を占めてゐる。分有地は、どこでも按分的に分配されてゐる、そして同時に、どこでもミールが農民ブルジョアジーの側に移つてゐることを示してゐる。比率を離れて云つても常に農民社會の上級群の方に有利になつてゐる。

從つて吾々が、經濟的富裕狀態による農民社會の分類だけを見て、ミールの「平等化」作用を看過してゐると思ふ者があれば、非常な誤りである。その正反對が

眞理だ。何故なら、吾々は精密な統計に據つて、まさに平等分割の經濟的意義をこそ研究するものだからである。即ち吾々は、如何なる程度に平等分割が行はれ、土地割替の全制度が結局において何を結果するかと云ふことを示したのである。たとひこの制度に從つて、土地が種々の質に應じて、乃至は種々の用益可能性に應じて申分なく分配されるとしても、農民社會内の富農群が、分有地の配分の場合にも貧農群に比して得をしてゐるといふ事實を避けるわけに行かぬ。分有地の中に入らぬ他の土地の配分は、次のように、比較にならぬほど不平等である。

農民經營に對する借地の意義は、人の知るところである。土地不足の結果、あらゆる形の賦役關係が、借地を基礎として生ずる。その本質から云つて、借地は、地主經營の雇役制度として現はれるものである。それは農奴的方法で地主に勞働力を供給するものである。從つて、農民の借地が、農奴的なものであることは疑ひを容れぬ。しかしわが國の資本主義的進化を主眼とする以上は、如何に

ブルジョア的關係が農民借地の中に現はれてゐるか、且つ現はれ得るかを、特別に研究しなければならぬ。この場合もまた重要なものは、農民社會内の種々の經濟群に關する統計であつて、共同體や農村全體に關する統計ではない。そこで、たとへばカリシェフ氏は、その著『ゼムストヴォ統計の總括』の中で、現物借地(貨幣を以てする借地でなく、イスポルシュチナ或は雇役を以てする借地)は、通例何處でも貨幣借地よりも高價であり、しかも著しく高價で屢々二倍にも達すること、更に、現物借地は農民社會の貧窮群の間に非常に著しく發達してゐることを認めざるを得なかつた。

富裕な農民なら誰だつて、貨幣で借地しようとする。「借地農はどんなことでもして貨幣で小作料を支拂ひ、それによつて、他人の土地に對する用益料を減らそうと計る」(カリシェフ、前掲書)。

このことは、農奴地主制度の特徴を有する借地の大部分が、最貧農側に存することを意味するものである。富農は中世的桎梏から脱却しようと計る。このことは、彼等が、充分な資金を自由にし得る程度に應じてのみ成功する。金をもつた者は、普通の市價で、正金で借地することができる。金をもたぬ者は賦役しなければならぬ。そしてイスポルシュチナまたは雇役によつて、三倍も高い地代を支拂はねばならぬ。雇役の場合の勞働價格が、自由賃銀勞働の場合に比して、どんなに低廉なものかといふことは、既述の通りである。しかし、農民の借地條件がその富有狀態によつて異るものとすれば、農民を分類する場合に、標準を分有地だけに限つてはならぬことは明白だ(しかもカリシェフ氏は一貫してそうしてゐる)。蓋し、こういふ分類方法では、種々異つた農家が人爲的に混淆され、土地プロレタリアートと農民ブルジョアジーとが一緒にされてゐるからである。

これを説明するために、殆んど全部ミールが勢力を占めてゐるサラトフ縣カミーシン郡の統計を引用しよう。(この縣では、二千四百五十四のミールのうち、二

千四百三十六が土地を共有してゐる。）こゝでは、借地による各種農家群は、次ぎの如き關係を示してゐる。

農家群	農家數（パーセント）	一農家當りの 分有地（デシャチン）	一農家當りの 借地（デシャチン）
耕作用牛馬をもたぬもの	二六・四	五・四	〇・三
一頭を有するもの……	二〇・三	六・五	一・六
二頭………	一四・六	八・五	三・五
三頭………	九・三	一〇・一	五・六
四頭………	八・三	一二・五	七・四
五頭以上……	二一・一	一六・一	一六・六
總体にて	一〇〇・〇	九・三	五・四

分有地の配分狀態はこれだけで既に明白だ。即ち富農は、家族員數から見て、貧農よりも豐富に土地を支給されてゐる。借地の配分は、右の表の示す通り十倍

も不平均である。最上級群は最下級群の三倍の分有地をもつてゐる（五に對する一六・一）、これに對してその借地は最下級群の十五倍である（〇・三に對する一六・六）。從つて借地は、農家間に存する貧富の差別を平均化するものでなく、却つてこの差別を十倍も增し、且つこれを一層深刻なものにするのである。ところがナロードニキ派の經濟學著述家（W・W、ニク・オン、マレス、カリシェフ、ウィヒリヤェフその他）の間に、往々これと正反對の結論を見るのは、彼等が次ぎの過誤を犯してゐるためである。即ち、普通に彼等は、農民をその分有地面積によつて分類する、そうした上で、分有地を多く所有する農家が、少なく所有する農家に比して、より多く借地してゐることを證明する。そこで彼等は、大多數の場合分有地面積の少ない、ミール內の富農が借地してゐること、並びに、ミールによつて達せられた外觀上の平等の背後に土地配分の極度の不平等がかくされてゐることを見拔くことができないのである。例へば、カリシェフ氏自身は、「借地を最

も多く用益する農民は、(イ) 土地配給の最も少ない範疇の農家群だが、(ロ) この範疇内では土地配給の最も多い農家である」ことまでは認めてゐるが、それにも拘はらず、各個農家群における借地の配分狀態を、系統的に研究してはをらぬ。

ナロードニキ派の經濟著述家のこの過誤を一層明瞭にするために、もう一つマレス氏の例を引かう（『パンの價格に及ぼす收獲の影響』。）氏は、メリトポル郡に關する統計を基礎として、「各人當り借地の配分は平等に近い」と推論してゐる。その根據は何か？ 農家をその現在男子勞働力の數によつて分類すれば、勞働者をもたぬ農家は、「平均」一・六デシャチンを借地し、勞働者一人を有する農家は四・四デシャチン、二人を有する農家は八・三デシャチン、三人を有する農家は一四デシャチンを借地することになるからである。しかしこの場合も問題は、この「平均」農家の中には、全然別種の經濟的位地にある農家が混合されてゐる點にある。例へば、勞働者を有する農家の中には、四デシャチンを借地し、五—一〇デシャチ

ンを耕作し、二—三頭の耕作用牛馬を有する農家と、二八デシャチンを借地し、五〇デシャチン以上を耕作し、四頭以上の耕作用牛馬を有する農家とが一緒にされてゐる點にある。それだから、マレス氏が結論した土地配分の平等は、想像的なものに過ぎぬ。現實においては、メリトポル郡では、二〇%の最富農群は、非常に豐富に分有地の配給を受け、購入地をすらもつてゐるにも拘はらず、借地の六・六三%即ち三分二を自己の手に收めて居り、全體で僅か五・六%の借地が、約五〇%の貧農全體に殘されてゐるに過ぎぬ。

更に、一方には、馬をもたぬ、または一頭の馬をもつ農家が、一デシャチンの土地、または一デシャチン中の一部分を借地してゐるに反して、他方には、四頭以上の馬をもつ農家が、七—一六デシャチンを借地してゐるのを見る時は、この場合、量が質に變化することは明白だ。前者の借地は窮迫からの借地であり、賦役借地である。こういふ地位にある「借地農」は、無條件的に、雇役や冬季雇傭や

貸金等による搾取對象物とならざるを得ぬ。これに反して、一二—一六デシャチンの分有地を有し、その上に尙ほ七—一六デシャチンを借地する農家は、云ふ迄もなく、貧乏だから借地するのでなく、金持ちだからであり、「暮らし」を稼ぎ出すためでなく、富むためであり、「金儲け」するためである。こゝに吾々は、土地賃借が資本主義的企業農經濟に轉化したのを見、農業企業家の發生を目のあたりに見る。この種の農家は、後に述べるように、農業勞働者の雇傭なしでは遣つてゆけないものである。

今度は、こういふ一般的現象は、どの程度まで企業を目的とする借地かといふ問題になる。市場のために營む農業の種々の領域には、色々の種類の農業企業が發生してゐることは後に示すことにして、こゝでは尙ほ二三の例を擧げて、借地に關する尙ほ二三の結論を引き出さう。

タウリード縣ドニエプル郡では、二五デシャチン以上を耕作する農家は、全體

の一八•二%を占め、一家當り一六—一七デシャチンの分有地を有し、一七—四四デシャチンを借地してゐる。サマラ縣ノウォウセンスク郡では、五頭以上の耕作用牛馬を有する農家は、總農家數の二四•七%である。これらは一家當り二五—五三—一四九デシャチンを耕作し、一四—五四—三四二デシャチンを借地してゐる(第一の數字は、五—一〇頭の耕作用牛馬を有する農家群に關するものであり、全農家の一七•一%を占める。第二の數字は、一〇—二〇頭を有する農家群、全體の五•八%を占め、第三の數字は、二〇頭以上の農家群、これは全體の一•八%を占めてゐる)。これらは、外部の協同組合の分有地から一二—二九—六一デシャチン彼等自身の組合から九—二一—七四デシャチンを借地してゐる。ペルム縣クラスノ•ウフィムスク郡では、全農家の一〇•一%が二〇デシャチン以上を耕作してをり一農家當り二八—四四デシャチンの分有地を有し一一—四〇デシャチンの耕地と一一八—二六一デシャチンの牧地とを借地してゐる。オルロフ縣の兩郡(グレ

チおよびトルブチェフ）では、四頭以上の馬を有する農家が全體の七・二％を占め各々一五・二デシャチンの分有地を有し、購入と賃借とによつて、用益地が倍加して二八・四デシャチンになつてゐる。ウォロネーシュ縣サーデンスク郡では、全體の三・二％の農家が、各自一七・一デシャチンの分有地を有し、借地を加へて三三・二％を占めてゐる。ニジニ・ノヴゴロド縣の三郡（クニャギニンスク、マカレフスク、ワシルスク）では、全農家の九・五％が三以上の馬を有し、一戸當りの分有地は一三―一六デシャチンだが、借地その他を加へて全體で二一―三四デシャチンを占めてゐる。

これで見れば、農民間における企業目的の借地は、決してその時限りの偶然なものではなく、一般的な、いたるところに普通な現象であることを知る。つねに極少數を成してをり、企業的借地によつて資本主義的に農業を編制する富農が、いたるところのミールの内部に發生してゐる。從つて、生計のための借地と企業

のための借地とについて、概括的な文句を並べたてたところで、農民經濟の問題に何等の解決をもたらすものではない。借地における農奴地主制度の特徴の發展と、並びに、借地における資本制關係の形成とが、どんな具體的事實によつて示されてゐるかを、研究することが無條件的に必要である。

全體の二〇％を占むる最富農が、村民並びに分有地から、如何なる持分を自已の手に集積してゐるかといふことについては、既に資料を示した通りである。今度は、次ぎのことを附け加へることができる。曰く、この最富農群は、農民借地全體の五〇・八―八三・七％を自已の手に集積し、五〇％を占める最貧農群には、借地全體の僅かに五―一六％が殘されてゐるに過ぎぬ。こゝからどんな結論が出てくるかは分かりきつたことだ！ロシアではどんな借地が優勢を占めてゐるか、困窮からの借地か、富有農民の借地か？農奴的借地（雇役と賦役）か、ブルジョア的借地か？と問へば、答へは容易である。借地する農家の數から云へば、疑ひも

なく、大多數の借地農は窮迫のために借地してゐる。農民の壓倒的多數にとつては、借地は賦役と同意義である。ところが借地の面積から云へば、疑ひもなく、半分以上の地面が富農の手に、資本制農業を組織する農村ブルジョアジーの手にあるのである。

借地面積の程度については、借地農全部と土地全體とにあて篏まる平均資料が與へられてゐるに過ぎぬ。この平均資料が、どの程度まで農民の無限の窮迫と困苦とを糊塗してゐるかは、タウリード縣ドニエプル郡のゼムストヴォ統計部報告によつて明瞭である。この郡には、好都合な例外として、種々の農家群が支拂つてゐる借地料に關する統計が存在してゐる。

農家群	借地農家數（パーセント）	一面農家當り借地面積（デシヤチン）	一デシヤチン借地料（ルーブル）
五デシヤチン迄の植付面積を有するもの	二五	二・四	一五・二五
五—一〇デシヤチン	四二	三・九	一二・〇〇
一〇—二五デシヤチン	六九	八・五	四・七五
二五—五〇デシヤチン	八八	二〇・〇	三・七五
五〇デシヤチン以上	九一	四八・六	三・五五
平均		五六・二	一二・四	四・二三

從つて、一デシヤチンに付き四ルーブル二三コペークの平均借地料は、ありのまゝに現實を曝らけ出し、事物の根底に横はる諸々の矛盾を撤廢するものである。貧者は、平均借地料の三倍も高價な、首を絞められるような價格で借地することを餘儀なくされる。富者は、土地を大束に買ひ込んで機に應じて土地の欲しい近隣者に二七五%の利得で讓るのを有利とする。借地は借地でも二種ある。農奴的賦役、アイルランド式借地もあれば、土地營業、資本主義的農業企業もある。

農民が自已の分有地を手離す現象は、ミール内部の資本主義的關係を一層明瞭

に示してゐる。即ちそれは、貧者の貧化と、この貧化した衆團そのものを犧牲にしての少數者の致富とである。借地と土地の讓渡とは、同一の根元をもつた現象であり、ミール及びその平等分割とは何の關聯もないものである。貧者が、平等に配分された自分の土地を、富者に手離すことを餘儀なくされるとすれば、分有地が平等に配分されてゐるといふことは、およそ實生活に何の意義があるだらうか？　そして公式の、國家による分有地平等分割が、實生活によつて改修されてゐるといふ事實ほど、「共有」觀を明瞭に否定するものがあるだらうか？　平等分割なるものは、發展する資本主義にとつて邪魔になるよりも、むしろ資本主義にとつて好都合のものである。そしてこの事は、貧農がその分有地を手離し、富農が借地を集積する事實によつて證明される。

しかしこの分有地を手離す現象は、どの程度まで擴がつてゐるのか？　十九世紀八十年代のゼムストヴォ統計部の研究は、今日では既に時代おくれなものだが

今のところこれに據るより外はない。この資料によると、土地を手離す農家數と、手離された分有地の百分率とは、大して大きなものではない。例へばタウリード縣ドニエプル郡では、農家の二五・七％が分有地を手離す。手離される分有地の百分率は一四・九％である。サマラ縣ノウォウセンスク郡では、農家の一二％が土地を手離し、サラトフ縣カミーシン郡では、手離される土地の百分率は一六％であり、ペルム縣クラスノ・ウフィムスク郡では、二三五〇〇人の農業主の中八五〇〇人が分有地を手離す、即ち三分一以上である。四一〇〇〇〇デシャチンの分有地のうち五〇五〇〇デシャチンが手離される、即ち約一二％である。ウォロネーシュ縣サーデンスク郡では、一三六五〇〇デシャチンのうち六五〇〇デシャチンの分有地が手離される、即ち五％弱。ニジニ・ノヴゴロド縣三郡では、四三〇〇〇中一九〇〇〇デシャチン、即ちこれもまた五％弱である。

右の一切の數字は大して價値のあるものではないと思ふ。何故なら、こういふ

プロセント關係では、一切の農家群中の農業主は、多少とも土地を平等に手離すことを暗默に前提してゐるからだ。ところがこの前提は現實とは正反對である。そこで借地および土地讓渡の絕對數の統計や、手離された土地および手離す農民の平均百分率よりも、主として貧農が土地を手離し、富農が借地の大部分の面積を借りてゐるといふ事實の方がより重要である。こういふ點では、ゼムストヴォ統計部の調査報告は、疑ひの影をも生まぬ。全體の二〇%の最富農が手離す土地は、讓渡土地全體の〇・三—一二・五%に當り、これに對して、全體の五〇%の最貧農が手離す土地は、同じく全體の六三—九三%に當る。もちろんこの貧農が手離した土地は、とりもなほさず富有農が借地するのである。この場合もまた土地の委讓は、農民社會の種々の群において、それぞれ異つた意義をもつことが明白だ！ 貧農は窮迫のために土地を手離す、——貧農は土地を耕作する能力がないから、種子や家畜や農具がないから、そして金が要るから手離すのだ。富農は殆んど手離さぬ、そして手離す場合は、自家の利益のために地面を交換するか、または直接に土地取引をする場合だけだ。

タウリード縣ドニエプル郡の具體的統計を次ぎに示さう。

	分有地を手離す農家(プロセント)	手離された分有地(プロセント)
植付しない農民	八〇	九七・一
五デシヤチン迄の植付面を有するもの	三〇	三八・四
五—一〇デシヤチン	二三	一七・二
一〇—二五デシヤチン	一六	八・一
二五—五〇デシヤチン	七	二・九
五〇—デシヤチン以上	七	一三・八
總体にて	一二・七	一四・九

土地の讓渡と農民のプロレタリア化とは、この場合、極少數の富者の土地取引と、非常に關聯してゐることは、右の統計から明らかではないか？ 手離された分

有地の百分率は、大きな植付面をもつ農民——即ち一七デシヤチンの分有地をもち、その上に三〇デシヤチンを購入し、四四デシヤチンを借地してゐる農民——の場合に、急激に高上してゐるのが特徴ではないか？ ドニエプル郡の貧農群全體、即ち五六〇〇〇デシヤチンの分有地をもつ四〇%の農家は、全體で八〇〇〇デシヤチンを借地し、二一五〇〇デシヤチンを手離してゐる。ところが富農群、即ち六二〇〇〇デシヤチンの分有地をもつ一八%の農家は、三〇〇〇デシヤチンの分有地を手離し、八二〇〇〇デシヤチンを借地してゐる。タウリード縣の三郡では、富農群が一五〇〇〇〇デシヤチンの分有地を借地してゐる、即ち手離された一切の分有地の五分三！ サマラ縣ノウォウセンスク郡では、四七%の馬をもたぬ農家と一三%の馬一頭を有する農家とが分有地を手離し、これに反して、耕作用牛馬十頭以上の所有者、即ち全農家數の七・六%が、各々二〇、三〇、六〇、七〇デシヤチンの分有地を借地してゐる。

購入地については、借地について云つたと殆んど同じことが云へる。唯一の區別は、借地は、尙ほ農奴制度の特徴を帶び、或る狀態の下では雇役と賦役とになる。即ちその附近の貧化した國民中の勞働力を、地主的經營によりつける手段となる點である。これに反して、分有地農民による私有地の購入は、純粹にブルジョア的な現象である。西方諸國では、屢々日傭勞働者と補助勞働者とに一片の地面を與へて、それを土地により付けてゐる。ロシアでは一八六一年の大改革に、既にこれと同じことが國家の手によつて實施されてゐる。一八六一年後、農民による土地購入がどんなに發達したかは、前に土地所有關係に關する資料を記した際に示しておいた通りである。こゝではこれと反對に、少數者の手への購入土地の大集積を指摘しなければならぬ。二〇%の富農は、賣買される土地全體の五九・七—九九%を獲得し、これに對して、五〇%の最貧農は、同じく〇・四—一五・四%を得るに過ぎぬ。これに依つて、農民が一八七七—一九〇五年の間に私有にした

土地七百五十萬デシャチンのうち、その三分二—四分三が極少數の富農の手に集積してゐると斷言して差支へない。農民の商社および協同組合によつて購入された土地についても、當然これと同じことがいへる。一八七七年には農民商社は、七六五〇〇〇デシャチンの購入地を所有してゐたが、一九〇五年には既に三七〇〇〇〇デシャチンを有し、農民協同組合は、一九〇五年には七六〇〇〇〇デシャチンの私有地をもつてゐた。會社によつて購入され、借地されてゐる土地の配分狀態が、個人によつて購入され、借地される場合と異ると考へるなら間違ひだ。事實はその反對を語る。たとへばタウリード縣の三郡について、農民商社が御料地から借地した土地の配分を調査した材料によると、借地の七六%は富農群(全體の約二〇%)の手にあり、四〇%の最貧農群は、借地總面積の四%を占めてゐるにすぎぬ。農民が借地したり、土地を賣拂つたりするのは、「金のため」以外の何物のためでもない。

四　農村における階級分裂

分有地、並びに賃借され、購入され、賃貸された農民地に關する上記の統計全體から、次ぎの結論が見出される。曰く、各農民によつて現實に用益されてゐる土地面積は、國家によつて規定された公式の分有地面積と、日に日に合致しなくなつてゐる。もちろん總數や平均面積だけを見れば、手離された分有地の面積は賃借された分有地の面積の中にかくれてしまひ、殘餘の農民地の借地と購入地とは、農家一體の間に一見平等に配分されてゐる。したがつて個々の農民自身によつて現實に用益されてゐる地面は、國家によつて規定された地面、即ち彼等の分有地とは、あまり齟齬してをらぬかのような印象をうける。しかしこの印象は架空的なものである。蓋し個々の農民によつて現實に用益されてゐる地面は、本來平等に分割されてゐた彼等の分有地とは、最上級および最下級の兩翼農家群の塲

合に、最も甚しく齟齬してをり、從つて「平均」を固執すると實相を逸してしまふからである。

事實上では、最下級農家群の場合にあつては、その用益地は分有地に比して、相對的に、また折々絶對的にも小面積である(土地の讓渡と借地面積の些少とのため)。ところが最上級農家群の場合にあつては、用益地面積は分有地面積に比して相對的にも絶對的にも、はるかに大きいが、それは購入地と借地とをその手に集積してゐるためである。全體の五〇%を占める最貧農の手には、既述の通り、三三—三七%の分有地があるが、事實彼等によつて用益されてゐる土地は、農民全體の用益地の一八・六—三一・九%に過ぎぬ。若干の場合は、前者は後者の殆んど半分に減つてゐる。例へばベルム縣クラスノ・ウフィムスク郡では、最貧農は分有地總面積の三七・四%を占めてはゐるが、實際に彼等が用益してゐる土地は一九・二%に過ぎぬ。一方、全體の二〇%を占める富農の分有地面積は、全體の二九

—三六%だが、その用益してゐる土地面積は三四—四九%である。この關係は尙ほ次ぎの具體的な統計によつても例證される。タウリード縣ドニエプル郡では、全體の四〇%を占める最貧農が、五六〇〇〇デシャチンの分有地を有してゐたが、實際に用益してゐた土地は、僅かに四五〇〇〇デシャチン、即ち、一一〇〇〇デシャチンも少ないわけである。ところが全體の一八%を占める富農は、六二〇〇〇デシャチンの分有地を有してゐたが、實際に用益してゐた面積は一六七〇〇〇デシャチン、即ち一〇五〇〇〇デシャチンも餘分に用益してゐたわけである。つぎの統計は、ニジニ・ノヴゴロド縣三郡に關するものである。

農家群	一農家當り分有地面積	一農家當り用益地面積
馬をもたぬ農家……	五・一	四・四
一頭を有する農家……	八・一	九・四
二頭を有する農家……	一〇・五	一三・八

三頭を有する農家……	一三・二	二一・〇	
四頭以上を有する農家……	一六・四	三四・六	
平均	八・三	一〇・三	

これによつて見ても、最下級農家群の場合は、土地の讓渡と借地との結果について云つて、その用益してゐる地面は、絶對的に減少してゐるのが分かる。ところで、この最下級群、即ち馬をもたぬ農家群は、全農家の三〇%を占めてゐるのだから、全體の約三分一の農家が、賃借と讓渡とによつて絶對的に土地を損失してゐることになる。馬一頭を所有する農家(三七%)は、その用益地面積を増加したが、ほとんど取るに足らぬ程度のものであつて、その割合は、農民全體の用益地面積が平均的に云つて増大した(八・三デシャチンから一〇・三デシャチンに)割合よりも低いのである。從つてこの農家群が、總土地用益に對する持分は減少してゐる。即ち彼等は、全三郡の分有地の三六%を占めてゐるが、その用益面積は

農民全體の用益面積の三四%に過ぎぬ。これに反して、極少數の最上級農家群の用益面積は、平均用益面積よりはるかに大である。即ち馬三頭を所有する農家(全農家の七・三%)は、一三デシャチンから二一デシャチンに、即ち一倍半を増加し、馬四頭を所有する農家(全農家の二・三%)は二倍以上に増加した。

これによつて吾々は、一般的現象として、農民經營における分有地の意義が、減少してゐるのを見る。しかもこの意義の減少は、農村の兩極群において、それぞれ異つた具合に現はれてゐる。貧農の場合に分有地の意義が減少したといふのは、貧農は貧困と窮迫とが増してくるために、止むなく分有地を手離し、家畜や農具や種子や資金の欠乏のために經營を縮小し、誰か雇主の下に勞働を探すか、それとも……天國を探すかするより外なくなつてゐるからである。農民社會の最下級群は死滅し、飢餓と壞血病と窒扶斯とが暴威をふるふ。ところが最上級郡の場合に分有地の意義が減少してゐるのは、經營が擴大した結果、分有地の制限を突

破しなければどうにもできなくなつたからであり、更に進んで、土地所有關係が全然新たな基礎の上に――即ち從來の賦役制度から離れた自由な基礎の上に、即ち舊來の父子相傳とは反對に、土地の購入と賃借といふような、市場上の取引を基礎にしなければならなくなつたからである。農民社會は土地が豊富になればなるほど、農奴制度の痕跡は薄くなり、その經營は急速に擴大し、一切の土地が商品となり、借地を基礎として市場のために合理的に編成された農業が樹立するようになる。新ロシアをその一例としてあげることができる。富農が分有地よりも購入地や借地を基礎として經營してゐることは、既に吾々の見た通りである。これは一見逆説(パラドクス)のように見えるが、事實はそれに相違なく、しかもロシアのうちの土地の豊富な地方でその通りなのだ！ こういふ地方では、最富農は分有地を非常に豊富に與へられてゐるに拘はらず、その農業經營の重點を、分有地から分有地以外の土地に移してゐる！

急速に展開しつゝある農民社會の兩極に、分有地がその意義を失ひつゝあるといふ事實は、農村變革――それは十九世紀が二十世紀に遺言したものであり、わが國の革命における階級闘爭に點火したものである――の諸條件の研究にとつても非常に重大なものである。この事實は、古い土地所有關係――地主的なものでも農民的なものでも――と斷絶することが、覆へすことのできぬ經濟的必然となつたことを公然と示すものである。この斷絶は不可避的なものであつて、地上のどんな權力でもそれを制止することはできぬ。たゞ爭點となるところは、この斷絶がどんな形式で行はるべきかといふ點だけである。即ち、地主貴族的土地所有を保存してミールをクラーク(一四)から横奪するストリピン式方法(一五)を以てするか、それとも土地の國有によつて地主貴族的土地所有を滅ぼして、土地に對するあらゆる中世的な桎梏を取りのぞく農民本位の方法を以てするかである。しかしそれについては、尚ほ後で悉しく述べよう。たゞこゝでは、分有地の意義が低下

すると共に非常に不平等な徴税が始まつたといふ、一の重大な現象に言及しておかねばならぬ。

ロシア農民社會における租税および納貢は、非常に著しい程度に中世的特徴をもつてゐることは明白である。こゝではロシアの財政史の範圍に屬する細目に立ち入るわけに行かぬ。こゝでは、たゞ、土地買戻に言及するだけにとゞめておく。これは中世期の農民用益税(ヨク)(オブロク)、すなはち農奴地主への納貢が、そのまゝに繼續したものに外ならぬ。警察國家がその徴收を扶けてゐるのだ。それには貴族地主地と農民地とに對する評價の不平等や、現物納貢などを想起すれば充分だ。まづ租税および納貢の總額だけを擧げたいと思ふ。それにはウォロネーシュ縣の農家收支表を例としよう。農民地からの總收入平均額は(六十六の典型的豫算の統計によれば)、四九一ルーブル四四コペーク、總支出額は四四三ルーブル、從つて純益は四八ルーブル四四コペークとなる。ところで「平均」農家當りの租貢

額は、三四ルーブル三五コペークに上る、即ち租貢は純益の七〇%を占めるわけである。もちろんこの納貢は、たゞ形式だけ租税の形を取つてゐるもので、實際は農奴地主による「賦役階級」の搾取に由來してゐるものである。平均農家の純貨幣收入は、全體で一七ルーブル八三コペークにのぼる、換言すればロシア農民の「租税」は、その純貨幣收入の倍額に上つてをり、しかもそれは、一八四九年でなく一八八九年の統計から見てそうである。

しかしこの場合もまた、平均計算が農民の窮迫を暈かしてをり、農民階級の境遇を實際以上に紛飾してゐる。經濟上それぞれ異つた狀態にある農家群の間の租税および貢税の配分に關する統計を見れば、租貢額は、馬をもたぬ農民並びに馬一頭を所有する農民(ロシアにおける農家全體の五分三)の場合は、貨幣純益の數倍に上つてゐるのみならず、純益總額を突破してゐる。しかし統計自身の口から語らせよう。

一　農家収支表（單位ルーブル）

農家群	總收入	支出	租税	同百分率
馬をもたぬ農家	一一八・一〇	一〇九・〇三	一五・四七	一四・一九
馬一頭を有する農家	一七八・一二	一七四・二六	一七・七七	一〇・二〇
馬二頭……	四二九・七二	三七九・一七	三二・〇二	八・四四
馬三頭……	七五二・一九	六三二・八六	四九・五五	七・八三
馬四頭……	九七八・六六	九三七・三〇	六七・九〇	七・二三
馬五頭以上……	一七六六・七九	一五九三・七七	八六・三四	五・四二
平均	四九一・四四	四四三・〇〇	三四・三五	七・七五

これで見ると、馬をもたぬ並びに馬一頭を所有する農民は、總支出額の七分一と十分一を租税の形で拂つてゐるわけである。農奴地主的貢税（オブロク）だつてこれほど高くはなかつた。地主にとつては、自分の財産に屬する農民大衆が、不可避的に貧化することは、利益ではなかつたらう。貢税の不平等を云へば、富農

はその收入に比して、貧農の三分一乃至二分一しか貢税を納めてをらぬ。この不平等は何に起因するのか？　農民の貢税の主要部分は、分有地面積に應ずるものだからである。農民にあつては、租税の持分と土地の持分とは、「人別」といふただ一つの概念に融け込んでしまふ。

右の例について、各種農家群に對する分有地一デシャチン當りの租貢額を算出すれば、（イ）二・六ルーブル、（ロ）二・四ルーブル、（ハ）二・五ルーブル、（ニ）二・六ルーブル、（ホ）二・九ルーブル、（ヘ）三・七ルーブルといふ數字が出てくる。このうち最上級群の中には大企業家が經營してゐて、特別に課税されてゐるのだから、この最上級群を除けば、あとは租税は殆んど平等に配分されてゐるのを見る。一農家當りの分有地の配分が、この場合も、大體において租税の分擔に應じてゐる。この現象は、わがミールの賦役制性質の直接の遺物（且つ直接の證明）である。雇役を基礎とする經營の根本條件を考へて見ても、同樣である。即ち農民が餓死的

な土地の分け前に縛りつけられてをらず、またその土地分け前の三倍も高く支拂ふように義務づけられてゐなかつたなら、地主は、農民「解放」後半世紀の今日、附近の農民の中から賦役勞働者を調達することができないだらう。農民が自分の分有地を手離す場合には、その分有地を買戻して、それに「拂ひ足し」をしなければならぬ。即ち農民が離村する場合、その分有地を讓り受ける人間に對して若干の金額を拂はねばならぬことは、十九世紀末のロシアに決して稀れではなかつたことを忘れてはならぬ。例へばシュバンコフ氏は、コストローマ縣の農民生活を描いた著書『婦人の味方』の中で、次ぎのように言つてゐる。即ちコストローマから移住する者の中で「自分の手離す土地に對して、少しでも代價を受ける農夫は、極く稀れの場合で、普通は農夫が土地を手離せば、土地を讓り受けた者はその土地の周圍に垣をめぐらすだけで、農夫の方から代價を支拂ふのである。」一八九六年發行の『ヤロスラヴ縣報告』の中にも、村を出る勞働者は自分の分有地を買戻し

をしなければならぬことについて、全册にわたつてこれと同樣なことが述べてある。

もちろん純粹に農耕だけを營む諸縣では、こんなに偉大な「土地の力」を見出すことは稀れである。しかしこういふ諸縣でも、農村の兩極に對して分有地の意義が低下しつゝある現象が、別の形で現はれてゐる。この現象はどこでも一般に當て篏まる事實である。しかしこの場合も、分有地面積に應じて課稅される結果は課稅の不平等がますます增大するといふことになる。經濟的發展は全線に涉つていろいろの形をとるが、結局は、中世的な土地所有形態が倒壞し、身分制度の制限(分有地、地主貴族地、等々)が崩潰し、諸々の種類の土地所有を打つて一丸とした新經濟形態が現はれるといふ結果に導く。十九世紀は二十世紀に對して、中世的な土地所有形態のこういふ「大掃除」の完成を、無條件的に遂行すべき義務として遺言したのである。爭ひの中心は、この「大掃除」が、農民的土地國有によつ

て行はれるか、それともクラークによるミールの横奪を促進し、領主的經營を地主貴族的經營に變化させることによつて行はれるかである。

こんどは、土地問題から家畜飼養の問題に移らう。この場合もまた、引きつゞき、農民經營の現行制度に關する統計を主眼にして、これを分類し鮮明しよう。吾々はこゝでもまた、一般的規則として、諸々の農民經營における家畜の配分は、分有地の配分に比してはるかに不平等であることを立言しなければならぬ。たとへばタウリード縣ドニエプル郡の農民の場合の牧畜は、次ぎの通りである。

農家群	一農家當り分有地面積	一農家當り家畜數
植付面を有せざる農家	六・四デシャチン	一・一頭
植付面五デシャチンまでの農家	五・五	二・四
五—一〇デシャチン……	八・七	四・二
一〇—二五デシャチン ……	一二・五	七・三
二五—五〇デシャチン……	一六・六	一三・九
五〇デシャチン以上……	一七・四	三〇・〇
平均	一一・二	七・六

家畜所有數から見た兩翼農家群の懸隔は、分有地配分から見たそれよりも、十倍も大である。諸々の農民經濟の實際の大きさは、普通に人々が、平均數だけで滿足して、分有地の大きさが唯一の尺度であるものゝように假定して考へてゐるものとは似もつかぬものである。どの地域をとつて見ても、いつでも、またどこでも、家畜の配分は分有地の配分よりも遙かに不平等であることを示してゐる。すなはち、全體の二九—三六%の分有地を占むる二〇%の富農は、その地方の農民全體の飼養する家畜の三七—五〇%を占めてをり、全體の五〇%を占める貧農群には、家畜總數の一四—三〇%が殘されてゐるに過ぎぬ。

ところが、こういふ統計では、まだまだ實際の懸隔を測ることはできぬ。家畜

數の問題に劣らず、否、時としてより以上に重大なものは家畜の質の問題である。みじめな經營で、四方八方から雇役の重荷を背負はされてゐる半ば赤貧の農民が少しでも良種の家畜を手に入れることができないのは、わかり切つたことである。主人が餓ゑれば、家畜も餓ゑるより外はない。ウォロネーシュ縣の農家收支に關する統計を見れば、馬をもたぬ及び馬一頭を所有する農家の家畜飼養が、どんなに悲慘な狀態にあるかといふことが、特に明瞭に分かるが、實にロシアにおける全農家の五分三がこういふ狀態にあるのである。農民の家畜飼養の特徴を示すために、右の調査を拔萃しよう。

農家別	一農家當り家畜頭數（牛馬に換算して）	年支出平均額（ルーブル） 農具および家畜仕入れのため	家畜飼養のため
馬をもたぬ農家	〇・八	〇・〇八	八・一二
馬一頭を有する農家	二・六	五・三六	三六・七〇
二頭	四・九	八・七八	七一・二一
三頭	九・一	九・七〇	一二七・〇三
四頭	一二・八	三〇・八〇	一七三・二四
五頭以上	一九・三	七五・八〇	五一〇・〇七
平均	五・八	一三・一四	九八・九

一八九六—一九〇〇年のヨーロッパ・ロシアでは、馬をもたぬ農家は、三百二十五萬戸であつた。農具および家畜に對する年支出額が、八コペークであるのを見れば、この部類の農家の農業「經營」がどんなものか想像できよう。次ぎに馬一頭を有する農家は三百三十三萬戸だつた。農具と家畜の調達のための彼等の年支出額が五ルーブルなのだから、その後にのこるものは、たゞ無限の窮迫に對する永劫の戰ひである。馬二頭を有する農家（二百五十萬戸）と三頭を有する農家（一百萬戸）の場合ですら、家畜と農具とに對する年支出額は、九—一〇ルーブルにす

ぎぬ。たゞ兩上級群（この種の農家は、ロシア全國で、農家總數一千一百万に對して一百萬）の場合にのみ、家畜および農具に對する支出額が、正當な農業經營に必要な額に幾分接近してゐるにすぎぬ。

從つて、こういふ狀態の下では、各種農家群における家畜が、同一種屬のものであり得ないのは、極はめて當然のことである。たとへば、耕馬一頭の價格は、馬一頭を有する農家では二七ルーブル、馬二頭を有する農家では三七ルーブル、三頭を有する農家では六一ルーブル、四頭を有する農家では五二ルーブル、五頭以上のところでは六九ルーブル、從つて兩翼農家群の懸隔は、實に一〇〇％以上である。こういふ現象は、ロシアばかりでなく、小經營と大經營とが共存する一切の資本主義國においても、同樣に現はれてゐる。自著『農村問題』（第一部、ペテルスブルグ、一九〇八年）の中で、私は、ドイツにおける農業および牧畜に關するドレヒスラー氏の研究が、これと全然同一の結果に歸してゐることを述べて

おいた。これによれば、平均家畜一頭の平均斤量は（一八八四年）、巨大地所の場合は六一九キログラム、二五（クタール以上の經營では四二七キログラム、七・五—二五ヘクタールの經營では三八二キログラム、二・五—七・五ヘクタールのところでは三五二キログラム、最後に二・五ヘクタールのところでは三〇一キログラムであつた。

更らに、土地の取扱ひ、部分的には土地の施肥もまた、家畜の數並びに質に依倚するものである。ロシア全國に對する全統計資料の示すところによれば、地主地の方が農民地よりも良く施肥されてゐることは、既に證明した通りである。今度は吾々は、こういふ分類は、農奴制度の時代には正當であり、尋常なものだつたが、今では時代おくれとなつたのを見る。個々の農民經營の間に深渠が生じた。およそ「平均的」な農民經營といふ觀念から出發する一切の研究、統計、推論、學說は、與へられた問題について、絕對に誤つた結論に導くものである。

惜しむらくは、ゼムストヴォ統計部は、各種の農家群そのものを研究することは極はめて稀れで、概括的な統計のみに限つてゐる。たゞペルム縣だけは例外で（クラスノ・ウフイムスク郡について）、各種農家の施肥に關する精密な統計が蒐集された。

農家群	施肥農家百分率	施肥農家一戸當り肥料荷量
耕作面五デシヤチン以下の農家	三三・九	八〇
五—一〇デシヤチン……	六六・二	一一六
一〇—二〇デシヤチン……	七〇・三	一九七
二〇—五〇デシヤチン……	七六・九	三五八
五〇デシヤチン以上……	八四・三	七三二
平均	五一・七	一七六

こゝに吾々は、經營の規模に依倚する各種の型（タイプ）の土地耕作を見る。この問題に

注意を拂ふ研究者は、ほかの地域においても、これと同樣な結論に到着した。オルロフ縣の統計部の調査によれば、富農にあつては、一頭の家畜から、貧農の場合に比して約二倍の肥料が採集される。一戸につき七・四頭の家畜の場合は、一頭から集まる肥料が三二一プードであるのに對し、一戸當り家畜數二・八頭のところでは、僅かに二〇八プードに過ぎぬ。ところで家畜一頭については、四〇〇プードの肥料量が普通とせられるから、この標準に達するものは、極少數の富農の場合だけである。この上に貧農は、必要に迫られて藁と下肥とを燃料に使用しそれどころか、時折りは下肥を賣つたりすることを餘儀なくされるのである。

これと關聯して、農民社會内における馬をもたぬ農家數の增大に關する問題を考察しなければならぬ。一八八八—九一年には、ヨーロッパ・ロシア四十八縣で、農家總數一千十萬戸のうち、二百八十萬戸の馬をもたぬ農家があつた、即ち二七・三%である。約九—一〇年後の一八九六—一九〇〇年には、一千百十萬戸の農家

のうち、馬をもたぬ農家が三百二十萬戸、即ち二九・二%となつた。これによつて農民社會の收奪が增大しつゝあることは疑ひない。ところがこの行程を農藝學的見地から觀れば、一見逆說的な結論に達する。そういふ結論を、一八八四年に(『ヨーロッパの使者』、一八八四年第七號で)、有名なナロードニキ派著述家W・W氏が引き出した。氏は、わが國の農民經營の場合と「規準的」な三圃農業の場合とにおける、耕馬一頭當りの耕地デシャチン數を、農藝學的見地から見て尋常なものとしてゐる。そうすれば、農民は馬を豐富に所有してゐることが證明される。蓋し農藝學的には、耕地面積が七—一〇デシャチンに到つて始めて耕馬一頭を必要とするのに、この場合は耕馬一頭につき、耕地面積は五—八デシャチンにしか付かぬからである。「從つて」とW・W氏は推論する、「ロシアのこの地方(中部黑壤帶地方)における、馬をもたぬ又は馬を失つた農民人口は、耕作用家畜數と耕作さるゝ土地面積との尋常な關係を再建するに、或る程度まで貢獻してゐるといふ見解が必然に生ずる。」この逆說は、馬の減少は土地が富農の掌中に集積した結果であつて、そのために耕馬數と耕作さるゝ土地面積との關係が「尋常」なものとして永續するといふことによつて說明される。この「尋常」な關係は「再建」されはしない(何故なら、およそこういふものは、わが國の農民經營において、これまで一度も成立したことはないからである)、却つて農民的プルジョアジーが生れるばかりである。この場合尋常なものはといへば、それは小農的經營における生產要具の分散である。——馬を一頭しかもたぬ百萬の農民が、百萬頭の馬で耕作する土地面積を、富農は五十萬又は七十萬頭の馬で、より良く、より綿密に耕作してゐるのである。

農民經營における農具については、普通の農民固有の農具と改良農業器具とを區別しなければならぬ。前者の配分は、大体において、耕作用家畜の配分と一致してゐる。これに關する統計の中からは、べつに農民經營を特徵付けるようなも

のを見出さない。これに反して、それよりも高價な改良農業器具は、比較的大きな農家によつてのみ購入され、その使用は、發達した經營においてのみ成功を伴ふものである。從つて改良農業器具の集積は法外に促進される。この集積に關する統計は非常に重要なものである。蓋しそれは、農民經營が如何なる方向に、進行しつゝあるか、並びに如何なる社會的條件の下にそれが行はれるかを判斷し得る基礎となる、唯一の統計資料だからである。一八六一年以來、この點では一歩前進を見たのは疑ひないが、地主經營のみならず農民經營にとつても、この進歩が果して資本主義的性質のものであるかどうかは、再三ならず爭論を惹きおこし、疑問視されてゐる。

左に、改良農業器具の配分に關するゼムストヴォ統計部の統計を示さう。

農家群	改良農具使用農家百分率 オルロフ縣二郡において	改良農具使用農家百分率 ウォロネシュ縣一郡において
馬をもたぬ農家	〇・一	—
一頭を有する農家	〇・二	〇・〇六
二—三頭 ……	三・五	一・六
四頭以上……	三六・〇	二三・〇
平均	二・二	一・二

この地方では、農民間の改良農業器具の配分は比較的貧弱である。

改良農業器具を所有する農家の平均百分率は、極少數である。最下級は、殆んど一般にこの種の器具を使用してをらぬが、これに反して上級群は系統的に利用してゐる。サマラ縣ノウォウセンスク郡では、全體で一三%の農夫が改良農具を所有してをり、その中で五—二〇頭の耕馬を有する農民群が四〇%、二〇頭以上の耕馬を有する農家群が六〇%を占めてゐる。ペルム縣クラスノ・ウフィムスク郡

(三區に限る)では、百戸の農家につき一〇個の改良農具の割合である。しかしこれは、全體を平均してのことであつて、二〇—五〇デシャチンを耕作する農家にあつては、百戸當りの改良農具五〇個、五〇デシャチン以上を耕作する農家では、同じく一八〇個にも上つてゐる。以上、各種地方に關する統計を比較して按分を取れば、二〇%を占むる富農は改良農具總體の七〇—八〇%を占め、貧農には一・三—三・六%が殘されてゐるに過ぎぬことが分かる。從つて、農民社會における改良農具の普及の增進は、富農社會の進歩であることは疑ひを容れぬ。農民全體の五分三を占めてゐる、馬をもたぬ又は一頭しかもたぬ農民は、この種の改良を利用することが殆んど全く不可能である。

五　農業賃銀勞働の發生

農民經營の研究において、今までのところでは、吾々は、農民を主もに經營主として觀察し、同時に、最下級群が絶えず經營主の列伍から追ひ出されてゐることを指摘した。どこに追ひやられるのか？　明かにプロレタリアートの列伍に。

そこで今度は、どういふ具合にプロレタリアートが、殊に土地プロレタリアートが形成されるか、如何にして農業に勞働市場が發生するかといふことを、より詳細に研究しなければならぬ。雇役經營にとつては、農奴地主的貴族と、並びに土地を分與されたために賦役を義務づけられた農民とが、代表的型(タイプ)だとすれば、資本制經營にとつては、雇傭主としての農業企業者と、被傭者としての日傭勞働者及び家丁とが典型的である。地主貴族と富農とが、雇傭主に轉化することは既に述べた。こんどは、農民が被傭者に轉化することを考察しよう。

賃銀勞働者に對する富農の需要は大きいだろうか？　普通に研究者のするように、各種農家の總數に對する、家丁を有する農家の百分率を考へれば、その百分率は大して大きなものではない。――タウリード縣ドニエプル郡では一二・九％、サマラ縣ノウォウセンスク郡では九％、サラトフ縣カミーシン郡では一二・七％、ペルム縣クラスノ・ウフィムスク郡では一〇・六％、オルロフ縣の兩郡では三・五％、ウォロネーシュ縣の一郡では三・八％、ニジニ・ノヴゴロド縣の三郡では二・六％。

しかしこの種の統計は、主として架空的なものである、何故ならそれは、家丁を有する農家の農家總數に對する關係、並びに家丁を出してゐる農家に對する關係を決定するに過ぎぬからである。あらゆる資本主義社會において、ブルジョアジーはつねに總人口中の極少數を形成してをり、賃銀勞働者を有する農家はつねに「僅少」である。從つてこの場合、一の新たな經營型が發生してゐるか、それとも、

賃銀勞働者の備入れが、時折に行はれるに過ぎないかといふことが大事な點である。この問題に對しては、富農中家丁を有する農家の百分率を擧げてゐるゼムストヴォ統計部の調査は、全く明白な答へを與へるものである。この百分率は、一區域全體の全農家に對する百分率に比して、著しく高率である。ペルム縣クラスノ・ウフィムスク郡に關する調査を引用しよう。この調査は珍らしくも家丁の數のみでなく、この地方の農業經營にとつて典型的である日傭勞働者の數をも調査してゐる。

農家群	一戸當り勞働力	農業賃銀勞働者百分率 季節勞働者	刈込	收穫	打禾
耕作面をもたぬ農家	〇・六	〇・一五	〇・六	—	—
五デシャチンの耕作面を有するもの	一・〇	〇・七	五・一	四・七	九・二
五―一〇デシャチン	一・二	四・二	一四・三	二〇・一	二二・三
一〇―二〇デシチチン	一・五	一七・七	二七・二	四三・九	二五・九

二〇—五〇デシャチン……	一・七	五〇・〇	四七・九	六九・三	三三・七
五〇デシャチン以上……	二・〇	八三・一	六四・五	八二・二	四四・七
平均	一・二	一〇・六	一六・四	二四・三	一八・八

これで見れば、富農は家族員數の高率を以つて特徴とし、より低度の富農に比して、より多くの家族員を勞働力としてもつてゐる。それにも拘はらず、賃銀勞働者に對する富農の需要は比較にならぬほどに大きい。經營を擴張する主因である所の「家族協業」は、こういふ風にして資本制協業に變化する。上級群においては、賃銀勞働者の雇傭は、既に明白に全然組織的に行はれてをり、擴張された經營にあつては、この賃銀勞働者の雇傭は無條件的に必要である。同時に、日傭勞働者の傭入れは、中級群の内部においてすら非常に行き渉つてゐることを示す。兩最上級農家群の内部では、全農家の一一三・三%が、即ち多數が勞働者を使用してゐるとすれば、一〇—二〇デシャチンを經營する農家群の内では、全農家數の

五分二以上を占める農家が收獲勞働者を使用してゐる。

この事實から、富農社會は、その御用を承はる、家丁及び日傭勞働者の數百万の軍勢なしには立つてゆけないといふ結論を引き出すことができる。既述の通り、家丁を有する農家の平均百分率に關して、區域的に調査された統計の結果は、その百分率が區域によつて著しく動搖してゐるに拘はらず、一般的に次きのことが判明する。即ち、家丁を有する農家は、農民社會の上級群に集積してゐる、換言すれば、富農は農業企業家に變化してゐる。全體の二〇%を占める富農が、家丁を有する農家總數の四八—七八%を占めてゐるのである。

農村の他の極に關しては、ゼムストヴォ統計部は、どの程度まで農家が各種の賃銀勞働者を支給してゐるかといふことについて、通常何らの調査をも示してをらぬ。わがゼムストヴォ統計部は、一連の諸問題を新たに提起し、その點では、諸縣に關する報告中の官邊の統計に比して一段の進歩を示してきた。しかしたゞ

一つの問題に對しては、舊來の御役所式の配列がゼムストヴォ統計の中にも維持されてきてゐる。即ちそれは、謂はゆる農民の「勞働收益」に關する問題である。農民の分有地の耕作は、その農民の本來の業務だと見做されてゐる。すべて、それ以外の業務は、「勞働收益」および「實業收益」といふ項目の下に入れて、經濟學のイロハに屬するような經濟的範疇の差別を滅茶々々に混淆してゐる。たとへば「農業營業者」といふ項目には、賃銀勞働者の衆團と農業企業家とが一緒にされてをり、「副收益を有する農家」の項目の下には、乞食と商人、下婢と工匠とが一緒に算入されてゐる。經濟的範疇のこういふ途方もない混淆は、明かに農奴地主制度の直接の遺物である。當時、地主貴族にとつては、彼れに對して納貢の義務ある農民が何に從事してゐようとも――商業を營まうが、賃銀勞働者であらうが、それとも獨立的經營者として實業に從事しようが――實際においてはどうでもよかつたのである。およそこの一切の農奴は、共通の貢稅を納めねばならなかつた。

そして彼等は、一時的に且つ條件付で、彼等本來の業務に從事することを免除されたものと見做されてゐたのである。

しかし農奴制度の廢止後は、こういふ考へ方は、日增しに現實と矛盾するようになつた。副收益を有する農家の多數は、疑ひもなく、賃銀勞働者を供給する農家の項目の下に入るのだが、しかしこの場合精確な圖面を得ることはできぬ。なぜなら實業を營む少數の農夫もまた右の一般的項目の下に入り、從つて窮迫者の地位が粉飾されてゐるからである。このことを一例によつて說明しよう。サマラ縣ノウォセンスク郡に對しては、ゼムストヴォ統計部は、農業「營業者」とその他の「營業者」の大衆團とを區別した。もちろん、こういふ稱呼は不精確なものではあるが、とにかく營業種目を列擧してゐるこの表目によつて、少くとも、一四〇六三人の「營業者」中、一三一九七人の家丁および日傭勞働者があることを認めることができる。こゝでは賃銀勞働者が非常に優勢を占めてゐる。農業營業者は次ぎ

のように分かれる。

農家群	「農業營業」を有する男子勞働者百分率
耕畜を有せざる農家の中	七一・四
耕畜一頭を有する農家の中	四八・七
二—三頭	二〇・四
四頭	八・五
五—一〇頭	五・〇
一〇—二〇頭	三・九
二〇頭以上	二・〇
平均	二五・五

これによれば、馬をもたぬ農民のうち十分七が賃銀勞働者であり、馬一頭を有する農民の中約半數がそうである。ペルム縣クラスノ・ウフィムスク郡では、「農業營業」に從事する農家の平均百分率は一六・二%に上り、これに對して耕作面

をもたぬ農家のうち、「營業者」は五二・三%を占め、五デシャチンまでの耕作面を有する農家の中では二六・四%を占めてゐる。特別に農業營業者が區別されてをらぬその他の郡では、これほど明白な圖面は得られぬが、「營業」と「勞働收益」とは、一般的に云つて最下級群の一特殊性であることを、一般的規則として認めることができる。最下級群における五〇%の農家は、勞働收益に頼つてゐる一切の農家の六〇—九三%を占めてゐる。

右の事實から、農民社會の最下級群、殊に馬一頭を有する農家および馬をもたぬ農家は、國民經濟的機構における位置から見れば、分有地を有する家丁および日傭勞働者(むしろ賃銀勞働者)であることを知る。この結論は、第一に、一八六一年以來の賃銀勞働者に對する需要の增加に關して、全ロシアに渉つて調査された統計により、第二に、收入源に關する最下級群の豫算の研究により、最後に、この群の生計に關する統計によつて裏書される。この三種の證明を幾分精密に調

べて見よう。

全ロシアにおける農業勞働者の數の增加に關する一般的統計は、移出勞働者に關する統計から讀み取ることができるだけである。しかもこの場合には、農業勞働者と非農業勞働者とが精密に區別されてをらぬ。總數の中で前者と後者と孰れが優勢を占めてゐるかといふ問題については、ナロードニキ派文獻では前者に有利に結論されてゐるが、吾々はそれと反對の意見を代表し、これを左に證明するだらう。一八六一年後、農民社會內の移出勞働者の數が非常に增大したことは、疑ひを容れぬ。一切の資料がこれを證據立てる。統計的にはこの現象は、旅行券發行による收入と旅行券發行數とに關する見積りによつて、略々事實に近く表示することができる。一八六八年には旅行券發行による收入は二百十萬ルーブルに上り、一八八四年には三百三十萬ルーブル、一八九四年には四百五十萬ルーブル。從つて二倍以上增加したわけである。旅行券發行數はヨーロッパ・ロシアにおいて一八八四年には四百七十萬、一八九七—一八九八年には七百八十萬—九百三十萬。即ち十三年間に倍加したのを見る。この一切の統計は、別の計算、例へばウルワロフ氏の計算と大體において一致してゐる。氏は二〇縣一二六郡に涉るゼムストヴォ統計部の、大部分古くさくなつた調査報告によつて、移出勞働者の見積數を五百萬とした。ツェー・コロレンコ氏は、この數を、個々の村落に從業してゐる勞働者に關する統計によつて、六百萬と計算した。

ニコライ・オン氏の意見によれば、右の總數中の「壓倒的多數」は農業從事者が占めてゐる。私は『資本主義の發達』の中で、六十年代、八十年代、九十年代についての調査および研究は、右の結論が虛妄なものであることを完全に證明する旨を述べておいた。移出勞働者の壓倒的多數ではないにしろ、とにかくその多數は農耕勞働者ではない。一八九八年 ＊ヨーロッパ・ロシアにおいて、居住證明書に對する各縣別の裏書數に關する最も完全な、且つ最新の調査を左に示さう。

縣	數	一八九三年※居住證明書に對する裏書總數
一、主として非農業從事者の減退を伴ふ十七縣		三三六、九五九
二、移住者の通過せる十二縣		一六七、二三一
三、主として農業從事者の減退を伴ふ二十一縣		二、七六五、七六二
合計	五十縣	六、三〇二、五九〇

※ 本文には一八九八年とあり、表には一八九三年となつてゐる。おそらく二者のうち何れかゞドイツ譯書の誤植である。(譯者)

移住者通過諸縣において、半數が農業勞働者だと假定すれば、勞働者は恐らく概約次ぎのように配分されてゐる、――即ち約四百二十萬は非農業賃銀勞働者であり、約三百六十万は農業賃銀勞働者である。右の數字のほかにルドネフ氏の數字を擧げることができる。氏は一八九四年に、一九縣一四八區に對するゼムストヴォ統計部の調査報告を基礎として、農業賃銀勞働者の數を概約三百五十萬と見積つた。この數は八十年代の調査に據つて、在村の農業勞働者と移出した農業勞働者との兩方を含むものである。しかし九十年代の終りには、移住した農業勞働

者だけでそれだけの數に上つた。

農業賃銀勞働者の數の增加は、地主經營と農民經營とで見た通り、農業における資本主義的企業の發達と直接に關聯するものである。たとへば農業における機械の使用を見よ。右は富有農家の場合は企業への轉化であることは、精密な統計に據つて示した通りである。地主經營の場合は、機械または改良農具類の使用は、一般に、この現象が如何に徐々に且つ漸次に雇役制度が資本主義によつて驅逐されてゐるかを示してゐる限りにおいて、重要な意義をもつものである。農民の農具の代りに地主の農具が現はれ、舊三圃農業の代りに新農具を要する新耕作方法が現はれ、賦役する農民は改良農具を以てする勞働には適しなくなり、家丁または日傭勞働者がこれに取つて代つた。

農村改革以後、ヨーロッパ・ロシアの中で最も多く機械の使用が增した區域では、勞働力を賣るために移住してきた勞働者に對する需要もまた、最も多くひろまつ

てゐるのを見出す。こういふ區域を成すものは、ヨーロッパ・ロシアの南界および東界地方である。右の區域への農業勞働者の移住は、新資本主義關係の、特別に典型的な、明瞭な現はれであつた。こゝで吾々は暫らく立ち止まつて、これまで優勢を占めてゐた舊い雇役制度と、今益々勢ひを強めつゝある新しい潮流とを比較しなければならぬ。先づ第一に、南部地方は農業における最高の賃銀を以て、特徴とすることに注意しなければならぬ。全十年間(一八八一—一八九一年)に關する統計によれば、——從つて一切の偶發的な動搖はその間に平均されるのだが——ロシア全國の中で賃銀は、タウリード、ベサラビア、ドン諸縣が最高である。そこでは勞働者は食扶持を含めて一ヶ年一四三ルーブル五〇コペーク、季節勞働者は五五ルーブル六七コペーク(夏期)を獲る。賃銀の高度において次ぎに位するのは、最も發達した產業を伴つた地方、即ちペテルスブルグ、モスコー、ウラヂミル、ヤロスラヴ。こゝでは農業勞働者は一年間に一三五ルーブル八〇コペーク、

季節勞働者は五三ルーブルを支拂はれる。賃銀の最も低い地方は中央部の農耕を主とする諸縣(カザン、ペンザ、タムボフ、リヤザン、ツーラ、オルロフ、クルスク)、即ち雇役、賦役、および農奴制度のあらゆる遺物を主とする地方である。こゝでは農業勞働者は一年間の賃銀として九二ルーブル九五コペーク——從つて資本制諸縣に比して一倍半も尠ない。——季節勞働者は三五ルーブル六四コペーク、從つて南部に比して一夏期に二〇ルーブルも尠なく支拂はれる。吾々が勞働者の著しい減少を見たのは、まさにこの中央部地方であつた。毎春こゝから百五十萬の人間が移出し、その中の一部は引きつゞき農業をつゞけて行くが(主として南部に移るが、一部分はまた下に述べるように產業諸縣に移る)、しかし又その中の極めて多くの者が、首府と產業諸縣に移つて非農業的勞働に入る。この主もな移出區域と主もな兩移入區域との中間(農耕を主とする南部と、兩首府並びに兩產業諸縣との中間)に、中程度の賃銀を伴つた一帶の諸縣が横はる。この諸縣は勞

働者の一部を、賃銀の一番安い、一番飢餓的な地域の中央部から引張つてきて、今度はその地方の勞働者の一部を一層賃銀の高い地方に押し遣るのである。ツェー・ノヴォレンコ氏は『自由賃銀』に關する著書の中で、こういふ勞働者の漂浪と住民の移住の行程を、非常に豊富な材料に據つて精密に記載してゐる。資本主義はこういふ風にして(資本主義の需要の見地から見れば當然のことだが)、人口の配分を著しく平均化し、賃銀を全國に渉つて水平にして、一の眞に統一的な國民的勞働市場を造り上げ、また賃銀を高く拂ふことによつて百姓(ムージック)を「そゝのかし」て、間斷なく舊生産方法の地盤を拂ひのけつゝある。地主諸君が、村の勞働者の道德的腐敗や怠惰や酩酊を移住のためだと云つて苦情を鳴らしたり、都市における勞働者の「風紀の頽廢」について際限なく嘆息するのは、まさに茲に起因するものである。

勞働者の移入が最强度に行はれる區域では、十九世紀末に著しく大きな資本制

企業が農業に現はれた。資本制協業は、たとへば、打禾機の如き機械の使用の下に發生した。テスエーコフ氏はヘルソン縣の農業勞働者の生活および勞働條件の記述の中で、馬を以てする打禾機は一四—二〇人もしくはそれ以上の勞働を要し、更に蒸氣打禾機は五〇乃至七〇人を要すると云つてゐる。若干の經營では五〇〇—一〇〇〇人の勞働者を糾合してゐる、農業經營にとつては格外に大きな數だ。資本主義は費用のかゝる男子勞働を婦人および少年勞働に置き換へることを可能にした。たとへばタウリード縣の主要勞働市場の一であるカホフカ村では、これまで四萬迄の勞働者、九十年代には二萬乃至三萬の勞働者が集つてゐたが、一八九〇年には一二・七%の婦人が勞働者の中に登錄され、更に一八九五年には一躍して二五・六%となつた。少年勞働者は一八九三年にはこの地に〇・七%を占めてゐたが、一八九五年には既に一・六九%に上つた。

資本主義經濟はロシアのあらゆる隅々から勞働者を引き寄せると同時に、その

勞働者を技能に應じて篩ひ分け、こうして工場勞働者の職階制度（ヒエラルキー）に似たものを造り上げた。たとへば資本主義は完全勞働者と半勞働者との區別を立て、後者はまた比較的有力な勞働者（一六―二〇歳）と「少しづゝ手助けをする」半勞働者（八―一四歳の小兒）とに分れてゐる。こゝには地主貴族が「自分の農奴」に對する舊「家長的」關係の痕跡なんかは微塵もない。勞働力は他のものと同樣な一の商品となつた。賦役と云ふ「純ロシア的」な型は消滅し、その代りとして一週間賃銀拂ひや、死物狂ひの競爭や、勞働者と農業主との爭議が現はれた。勞働市場における勞働者大衆團の滯貨や、未曾有の苛重な、健康に有害な勞働條件は、大經營に對して社會的營理を行ふ企てを生んだ。こういふ企ては農業における「大產業」に特徵的なものだが、もちろんそれは、政治的自由と合法的勞働者編制體との缺如のために繼續し得なかつた。浮住勞働者の勞働條件の苛酷は、勞働時間が十二時半から十五時間まで延長されてゐることによつて想像ができる。機械で働らいてゐる勞働

者の廢疾は、毎日の現象となつた。勞働者の職業病も增大した（例へば打禾機械で働らくものゝ場合等）。最完全のアメリカ式な純資本主義的搾取の卓越は、十九世紀が終る頃のロシアにおいて觀ることができる。同時にそれと並行して、純中世的な、先進諸國では既に疾うの昔に消滅した、雇役および賦役を伴ふ經營の形式が存在してゐる。ロシアで農業經營關係がこんなに非常に種々樣々な具合に形成されてゐる狀態は、農奴地主的搾取方法とブルジョア的搾取方法との融合に導くものである。

ロシア農業における賃銀勞働の成立條件の分析を終る前に、尙ほ最下級群の農民經濟に關する收支統計を述べよう。この場合、賃銀勞働は、「勞働收益」とか「實業收益」とかの婉曲優美な名稱の下に云ひ現はされてゐる。この「勞働收益」からの收入は、農業經營からの收入に對してどんな關係に立つてゐるか？ ウォロネーシュ縣の馬一頭を有する又は馬を所有しない農民の收支表は、右の問題に對して

充分な解答を與へる。一切の收入源からの總收入は、馬を所有しない農民の場合は、一一八ルーブル一〇コペークに當る。そのうち、農業の經營からくるものが五七ルーブル一一コペーク、「營業」からくるものが五九ルーブル四コペーク。後者は、「人身的營業」からの三六ルーブル七五コペークの收入と、〆めて二二ルーブル二九コペークの他の種々の收入とを合せたものである。後者の數字の中には、分有地讓渡から生ずる收入が含まれる。馬一頭を所有する農民の場合は、總收入は一七八ルーブル一二コペーク、その内一二七ルーブル六九コペークが農業から、四九ルーブル二二コペークが營業から（三五ルーブルが人身的營業から、六ルーブルが車馬運搬賃、二ルーブルが「商工企業」から、六ルーブルがその他の種々の收入源から）くるものである。農業經營のための支出を差引けば、營業からの四九ルーブル二二コペークに對して、農業からは六九ルーブル三七コペークを得ることになる。ロシアにおける全農家の五分三は、こういふ風にして生計を立ててゐ

るのだ。この農民の生計は、家丁のそれに比して高くないばかりか、屢々低いものであることが分かる。この同じウォロネーシュ縣では、家丁の年給は、平均（一八八一―一八九一年）食扶持なしで――それは四二ルーブルにつく――五七ルーブルに當る。これに對して、馬をもたぬ農民は、平均四人の一家族全体を一年間に七十八ルーブルで養つてをり、馬一頭を有する農民は、五人の家族員を養ふに、一年間九十八ルーブルを以てしてゐる。ロシアの農民は、雇役や土地賣却や資本家の搾取によつて、ヨーロッパでは不可能と考へられてゐるような、乞食的な、飢餓的な生計を營んでゐる。ヨーロッパでは、こういふような社會的型を、被救恤民と呼ぶのである。

六　農業における資本主義の發展樣式

農民社會内の分解行程について、以上述べてきたことを要約するために、先づ文献中この點に關しロシア全國を取扱つた唯一の統計を引用したい。吾々は右の統計によつて、農民社會内の種々の群と、各時期におけるそれらの組合せとが、どんなものであるかを判斷することができる。その統計といふのは、陸軍省が行つた馬匹調査に關する統計である。私は『資本主義の發達』第二版の中で、一八八八―一八九一年と一八九六―一九〇〇年との兩期間に渉つて、ヨーロッパ・ロシア四十八縣に對する右の統計を引用しておいた。こゝにその中の最重要な結果を拔萃すれば次ぎの如くである。

農家數

（單位百萬）

農家群	一八八八―一八九一年		一八九六―一九〇〇年		增減
	總數	%	總數	%	
馬をもたぬ農家……	二・八	二七・三	三・二	二九・二	增 0.5
一頭を有するもの……	二・九	二八・五	三・四	三六・三	
二頭を有するもの……	二・二	二二・二	二・五	二二・〇	減 0.1
三頭を有するもの……	一・一	一〇・六	一・〇	九・四	減 0.2
四頭以上を有するもの	一・一	一一・四	一・〇	九・一	減 0.3
計	一〇・一	一〇〇・〇	一一・一	一〇〇・〇	

右の統計は、既に前にも簡單に述べておいた通りに、農民社會の收奪が增大しつゝあることを證明するものである。一百萬を算する農家數の增加は、專ら最下級群の農家だけに係はるものであつて、この群はその數を著しく增大した。馬匹總數はこの期間に一六・九一百萬から一六・八七百萬に減少した。即ち農民社會は總體において所有馬匹數を減じたわけである。最上級群にあつてもまた馬匹が減つてゐる。一八八八―一八九一年には、一農家當り五・五頭だつたのが、一八九六―一九〇〇年には五・四頭に過ぎぬ。

おそらく右の統計から、次ぎのように結論する人があるかも知れぬ。曰く、農民

社會は少しも「分化」してをらぬ。最貧級の農家が最も多く增加し、最富級の農家が最も多く(農家數から云へば)減少してゐる。これは分化ではなく、全体が乞食の水準に近付いたのだ！ これと同樣な前提に基いた、これと同樣な結論を、極めて屢々文獻の中に見出すことができる。しかし乍ら、一とたび農民社會内の諸群の相互の按分が變化してゐるかどうかといふ點を問題とするときは、吾々は別箇の結論に到達するだらう。一八八八—一八九一年には、全農家の半數、即ち最下級群は、全農家に對する馬匹總數の二三・七%を所有してゐた。そしてこの率は、一八九六—一九〇〇年にも、まさに同一のものであつた。ところで全農家の五分一、即ち最富裕群は、第一の期間には馬匹總數の五二・六%、第二の期間には五三・二%を有してゐた。そこで右の二つの農家群の相互關係は、殆んど變化がなかつたことは明かである。農民社會はより貧しくなつた。富裕農もまた貧しくなつた。一八九一年の恐慌は非常に重大な影響を及ぼした。しかしそれに拘はらず、貧化す

る農民に對する農村ブルジョアジーの位置は一向變化しなかつた。そしてもとより、それは、本來から云つて變化する筈のものではなかつた。

ところで勝手氣まゝに擇び出した統計資料だけを基礎として、農民社會の分解を判斷しようと敢へてするなら、右に述べた狀態は屢々看過されてしまふのである。例へば、馬匹の配分に關する箇々の統計資料を基礎として、農民社會内部の分解行程の問題を、少しでも解明しようとするならば、それは實に笑ふべき考へと云はねばならぬ。嚴密に云へば、こういふ馬匹の配分は、農家經濟に關する一切の統計の總體と關聯させて觀察しなければ、何ものをも證明しないのである。こういふ統計資料を吟味するに當つて、借地の配分狀態、土地の委讓、改良農具、經營上の改善、勞働收益、土地購買、賃銀勞働者、耕作用家畜等について、各種農家群が如何なる共通點をもつてゐるかを確證し、更に進んですべてこれらの現象の内部に存する諸々の對立は、相互に密接に聯結してゐるものであり、且つそれは、

相對立する二つの型——プロレタリアートと農村ブルジョアジーと——が現實に構成されてゐることを示してゐる所以を證明したのちに、始めて、馬匹の配分狀態に關する統計のような單獨な資料を、前述の如き說明の例證として引用することができるのである。これに反して、馬匹數が、例へば富農群ではこれこれの期間に減少したと云つたような箇々の場合だけを捉へて、それだけのことから、農民社會內部の農村ブルジョアジーや他の諸々の農家群の位置に關して、何等かの一般的に妥當な結論を引き出さうとするなら、それは大間違ひの骨頂と云はねばならぬ。〝どんな資本主義國においても、どんな經濟部門にあつても、發達は均整に行はれてはをらぬ、そしてまた決して行はれ得ないのである（市場の支配下にあつては）。資本主義なるものは、鋸齒狀以外には發展し得ないものである。〟思ひ切つて突進するかと思へば、その次ぎには暫時また以前の水準以下に低下する。そしてロシアの農村危機と目前に迫る變革の問題の核心は、およそ資本主義の發

展がどの程度まで進んだが、そしてどんな速度で進んでゐるかといふことではなく、そういふ資本主義的の危機と變革とが果して存立してゐるかどうか、そしてその結果、農民社會が農村ブルジョアジーとプロレタリアートとに轉化してゐるかどうか、最後に、ミール內部の各農家間の關係はブルジョア的なものであるか否かといふことである。言葉を換へて言へば、ロシアにおける農村問題に關するあらゆる研究の第一の任務は、根柢的な事實によつて、農村關係の特徵を階級的區分の中に求めて、それを確證することでなければならぬ。そして、どんな階級と、どんな發展の方向とを問題にすべきかが說明されたのちに、始めて、發展の速度や、一般的發展が行はるべき種々の形態といふような箇々の問題について語ることができるのである。

マルクス主義であるならば、誰れでも、農村改革以後の時代のロシアにおける農民經營を觀察するときは、それは典型的に小ブルジョア的なものであることを

是認するに相違ない。そして、ロシアの農民經營に關する彼れの一切の見解は、右の認識を基礎としなければならぬ。マルクス派の經濟學者とナロードニキ派の經濟著述家との論爭の中心點は、主として、農民經營を右のように特徴付けることが正當であるかどうかを確定することであつた（そうして意見の相違の眞の根據を解明しなければならぬ場合は、勢ひそうなるべきであつた）。この問題について完全に了解するところがなければ、どんな具體的な又は實際的な問題にも進むことは不可能である。たとへば、〝わが國の農村革命は、およそどんな方向に進んでゐるか、そして事件の箇々の進行に際して、如何なる階級が勝利を獲得し得るかといふようなことを、先づ第一に明かにしなければ、十九世紀が廿世紀に遺言したところの農村問題の解決方法を考察することは、全然絶望的であり、且つ徒らに混亂を招くに過ぎないだらう。〟

前に述べてきたような、農民社會の分解に關する明細な資料から判斷すれば、

爾餘の一切の問題は、專ら農村變革を土臺としてゐるものであつて、農村變革に對する完全な理解なくしては、一歩も先きに進むことはできないのである。吾々はこれまで、ロシアの隅々にわたつて、農民社會の各種群の間の相互關係を詳細に研究してきたが、その結果は、すべてミール內部の國民經濟的關係の本質を、一目の下に示してゐる。右の相互關係は、與へられた歷史的局面における、農民經營の小ブルジョア的性質を明瞭に示すものである。かつてマルクス主義者が、農業における小生產者は（分有地で經營すると否とを問はず）、商品經濟の發展とともに、必然的に小ブルジョアになると云つたとき、多大の異論を惹起し、そんなことは何等證明されてをらぬ、それは外國の原型を、形式的にわが國の特殊な事情の上にあて嵌めたものに過ぎぬと云つて非難されたことがある。しかしながら、富裕なミール所屬員は、貧しい仲間から小作地を奪ひ取つてをり、家丁を使用してそれを賃銀勞働者に轉化させてゐると云つたような、諸農家群の相互關係に關す

る資料は、火を睹るよりも明かに、マルクス主義者の一切の推論を確證してゐる。ロシアの經濟的發達の上に及ぼすミールの影響の意義に關する問題は、右の資料によつて究極的に決定された。けだしそれは、現實的の（幻想化されたのでない）ミールの事實上の發展を鮮やかに示してゐるからである。分有地が平等に分割されようと、土地の割替が行はれようと、自作農やミール所屬員の事實上の經濟的發展は、農村ブルジョアジーを發生させ、貧農の大集團をプロレタリアの列伍に引きおとすような方向に進んでゐることが、明かに示されてゐる。後に尙ほ説明するが、ストリピンの農村政策も、トルードキキ（一七）が要求する土地國有政策も、ひとしく右の發展方向に基いてゐるものである。但し農村問題のこの兩つの「解決」方法の間には、社會發展の速度や、生產力の高上に關する見地から、並びに大衆の上に與へる利害得失の點から見て、多大の相違が存することは事實である。

こんどはロシアの農業は、市場と商品交換に關して、どの程度まで發達してゐ

るかといふ問題を研究しなければならぬ。この研究は、農村改革以後の時代は商業及び交換經濟の增大を以て特徴としてゐると云ふ、明々白々な前提を基礎とするものである。この事實を統計的に證明することは、全く無用のことと思ふ。たゞ茲では、第一に、今日の農民經濟はどの程度まで市場の勢力の下にあるか、第二に、農業が多少とも市場の勢力の下に來た以後は、どんな根本形態を取つてゐるかといふ二つの問題が解決されねばならぬ。

第一の問題に對して、最も信憑すべき資料となるものは、ウォロ　ーシュ縣ゼムストヴォの家計調査である。この統計では、農家の貨幣收支を總收支から引離して計算してある。次表は市場の影響を示すものである。

農民の總收支に對する貨幣收支の百分率

農家別	支出	收入
馬をもたぬ農民……	五七・一	五四・六

馬一頭を有するもの…	四六・五	四一・四
二頭を有するもの……	四三・六	四五・七
三頭を有するもの……	四一・五	四二・三
四頭を有するもの…	四五・四	四〇・八
五頭以上を有するもの	六〇・二	五九・二
平　均	四九・一	四七・五

これによれば、富農や半プロレタリア貧農の經濟はもとより、中農の經濟すらも著しく市場に依倚してゐることを知るのである。從つて、不斷に增大しつゝある市場の大勢力を度外視する農民經濟の研究は、根本的に誤謬であると云はねばならぬ。農奴地主的ラチフンヂウムと地主貴族的土地所有との絕滅は、十九世紀末のロシア農民社會が結局一切の期待をそこに集注してゐる方策であるが、この方策は、市場の勢力を弱めないで却つて強めるものである、蓋し市場のための商品

生產の增大は、雇役および賦役のために阻止されてゐるからである。

第二の問題に對しては、次ぎの如く言ふことができる。即ち漸次的な農業の資本化は、一種獨特の行程であつて、この行程は、ロシア全國にあて嵌まる平均的な統計資料を以ては、正當に理解することのできない性質のものである。農業なるものは一擧に商品生產の性質を獲得するものではなく、且つまた、それは、ロシア各地方における各種農業經營に對して、同一の型式に從つて行はれるものでもない。それと反對に、市場は、或る地方では複雜な農業の一面を征服し、他の地方ではまた別の一面を征服するものであつて、この場合、市場に征服されない爾餘の部面は消滅せずに、却つて「新流行」の部面に、即ち貨幣經濟に適應するようになるものである。例へば或る地方では、主として穀類を市場に送り出す經營が行はれてゐるとする。この場合、販賣のための主要生產物は穀類である。こういふ種類の經營では、牧畜は副次的な役割を占めてゐる。そして極はめて稀れな場

合ではあるが、經營が全然一面的に穀類栽培のみに限られてゐてその方向に發展する場合は、牧畜は屢々消滅してしまふ。たとへばアメリカ西部地方の謂はゆる「小麥圃」は、時として一と夏の間、全然家畜なしですますような仕組みになつてゐた。これに反して他の地方では、市場のために主として牧畜をやつてゐるような農業經營がある。この場合、販賣のための主要生產物は肉類と製乳品とである。純粹の農耕經營が牧畜に變形したのである。この兩つの場合、經營範圍と經營組織もまた、明かに互ひに異つたものとなるだらう。今尙ほ屢々都市地域に存する製乳經營に對しては、その農家の植付面積を基礎として判斷を下すわけには行かぬ。ステップ地方の穀類栽培と都市近郊の穀類栽培、或は莨栽培と「搾乳圃(ミルク・ファーム)」(イギリス流の表現を用ゐれば)とに對しては、同一の標準によつて大小を比較するわけには行かぬ。

農業に對する商業及び交換の侵入は、農業を專門化し、且つこの專門化は益々

增大しつゝある。一經營の規模に關する箇々の特徵(例へば馬匹數)は、市場を基礎とする農業において、種々の地方でそれぞれ異つた意義を有してゐる。例へば大都市附近に存在する、馬をもたぬ農民の間には、吾人の容易に想像し得るように、乳畜を所有し、製造品を大規模に販賣し、賃銀勞働者を使用しゐる大農家がある。この種の農業企業家の總數は、馬をもたぬ及び馬一頭を有する農民の總數にくらべれば、もとより極はめて微々たるものではあるが、翻つて全國にわたる總數を考へるならば、農業における資本主義のこの特殊な現象形態を見逃がすわけには行かないのである。

こういふ狀態に對しては、特別の注意を拂ふ必要がある。これを看過するなら、農業における資本主義の發展を叙することはできず、たとひできても、あまりにそれを單純化し過ぎる誤謬に陷るだらう。農業の有する現實の諸々の特殊性を認めるならば、農業における資本主義の發展行程は、その錯綜したまゝの形でのみ把握

することができる。諸々の特殊性をもつてゐるといふ理由のために、農業は資本主義發展の法則に從はないと主張するのは、全然不當である。農業の特殊性は、たしかに市場に對する障碍物だといふのは正しい、しかしそれにも拘らず、商品生產を基礎とする農業が增大する行程は、いたるところに、且つ あらゆる國に進行してゐるのだ。とは云へ、商品生產を基礎とする農業が生長する形態は、實際獨特なものであつて、特殊の研究方法を必要とするものである。

以上のことを說明するために、商品生產を基礎とする農業を有するロシアの各地方から、分かり易い實例をあげて見よう。市場のために穀類を生產してゐる地方(新ロシアとヴォルガ地方)では、穀類收獲の激增が現はれてゐる。一八六四年から一八六六年の間には、これらの諸縣は、黑壤帶の中部地方の背後に位してゐた。當時實收獲は、住民一人あたり僅々二・一チェトウェルトに過ぎなかつたが、一八八三——一八八七年には右諸縣は、一人あたり三・四チェトウェルトの實收獲を以

て、すでに中部地方を追ひ越してしまつた。就中この地方は、農村改革以後は、植付面積の增大を以て特徵としてゐる。土地の耕作はまだ依然として非常に原始的のところが尠なくない。できるだけ多くの田地に播種しようとばかり考へてゐる。但し十九世紀後半にこの地方に、アメリカ式の「小麥圃」のようなものが設けられた。この地方では、植付面積によつて(最上級農家群の場合は一戶あたり二七一デシャチンにも上つてゐる)、經營の範圍と種類とを推定して差支へない。

ところが別の地方では(工業地域、殊に兩首府附近の地域では)、こういふような植付面積の增加は問題とはなり得ない。この地方の經營の特徵とするところは、市場のための穀類生產ではなく、牧畜である。この地方の農家經濟は、耕作面積や耕馬數によつて判斷することはできぬ。こゝでは、はるかに信憑し得る標準となるものは牧牛數である(製乳經濟)。そしてこの場合、大經營の進步に對する特徵をなすものは、飼草の播種および栽培高であつて、穀類植付面積の增加ではな

い。こゝでは、多數の馬を有する農家は、他に比して尠ない。おそらく時として
は、馬匹數の減少そのものが、農家經濟の進歩を語るものであり得る。その代り
この地方では、農民が他の地方に比して多數の牝牛を所有してゐる。ブラゴエシ
エンスキー氏はゼムストヴォ統計によつて、一農家あたりの牝牛平均數を一・二頭
と計算してゐる。ペテルスブルグ、モスカウ、ツーヴェル、スモレンスク諸縣の十
八郡では、一農家あたり一・六頭、ペテルスブルグ縣だけで云へば一・八頭の割合
である。流動資本も、生産行程に投入された資本も、こゝでは主として牧畜生産
物を以てされる。收入高は主もに乳牛の頭數で算定される。この地方には、謂はゆ
る「乳酪製造所」が存在してゐる。且つまた富農は、益々多くの農業賃銀勞働者を
使用してゐる。疲弊した中部地方から工業諸縣に移住してくるものは、農業勞働
に赴くといふことは、既述の通りである。換言すれば、同一の國民經濟的現象が、
こゝでは全然別箇の形で現はれてゐるのであつて、こういふ經營の條件は、純粹

の農業經營にあて嵌まる條件とは全く似もつかぬものである。例へば蔓栽培の如
き特殊栽培や、または農業と農産物の加工とが結合してゐる場合（葡萄搾取、甜
菜、甘蔗、種油、馬鈴薯、澱粉等の産出）を觀察すれば、企業家經營と共に生ず
る諸々の關係の發現形態は、市場用穀類生産のための經營の場合に現はれる形態
にも類似せず、市場のための牧畜の場合に現はれる形態にも類似しない。この場
合に標準となるものは、それぞれの作物の植付面積か、それとも、その場合の農
業經營と結合してゐる生産物加工の企業範圍かである。

田地面積や家畜數だけを問題としてゐる農業統計は、こういふ各種の形態につ
いては些かも敎へるところがない。從つてそういふ統計の結果だけを基礎とする
推論は不當なものである。農業は益々急速に市場のための生産を基礎とするよう
になり、商業の影響は非常に擴大し、そして資本は、一般的な總數や抽象的な平
均統計によつて考へられる以上に、根本的に農業を變形してゐるのである。

七　農村變革の必然とその結果

次ぎに十九世紀末におけるロシアの農村問題及び農村危機の本質に關する、これまでの叙述を要約したい。――この危機の本質は何に存するか？　シャーギン氏は、彼れの小冊子『財産の共有か分割か？』（ウィルナ、一九〇七年）の中で、次ぎのように主張してゐる。曰く、わが國の農業危機は農業術の危機であつて、その危機の最深の根底は、わが國の極度に低い農業技術を高め、高度の耕作制度に移ることの必要にあると。

この意見はあまりに抽象的であるが故に不當である。高度の技術に移らなければならぬことは、もとより疑ひを容れぬことだが、第一に、ロシアでは一八六一年以來、こういふ推移は事實上行はれて來てゐる。たとひその進歩は極めて徐々たるものではあつても、地主經營も農民經營も――この場合後者を代表するもの

は少數富農である――ひとしく、飼草の栽培や、改良農具の使用や、組織的な細愼な施肥等に移つてゐることは、爭ふことのできぬ事實である。しかし農業技術上のこの徐々たる進歩は、一八六一年以來發展してゐる一般的行程だとすれば、一般に承認されてゐる十九世紀末の農業危機の激成を説明するには、たゞぼんやりと右の行程に言及するだけでは明かに不充分である。第二に、成功の見込みのある農村問題「解決」の兩つの形態、即ち、地主貴族的土地所有を維持し、結局ミールを絶滅して、クラークによつてそれを掠奪する方法による、上から下へ向ふストリピン流の解決も、地主貴族的土地所有を絶滅して、土地全體を國有にする方法による、下から上へ向ふ農民本位の（トルードヰキ流の）解決も、兩つながらそれぞれの樣式で、高度の技術への移轉を容易にするものであつて、兩方とも農業術の進歩の軌道を基礎とするものである。たゞ第一の解決法にあつては、貧農が農業から押し出される行程が促進される點に進歩があり、第二の解決法の場

合は、農奴地主的ラチフンヂウムの絶滅によつて、次第に雇役が姿を消す點に進歩があるだけの相違である。貧農が自巳の田地で極端に粗末な「經營」を行つてゐることは、疑ひもなき事實である。假りにその土地を、極少數の富農の掠奪と併呑とに委せるなら、それによつて農業術が高上することもまた疑ひを容れぬ。しかし同時に、雇役や賦役を搾取してゐる貴族所有地もまた、極度に粗末に經營されてをり、加之、分有地よりも一層粗末に經營されてゐることもまた、疑ふべからざる事實である。(前に擧げた統計を想起せよ。即ち分有地からは一デシャチン當り五四プードの收獲があり、地主農經營地からは六六プード、イスポルシュチナによつて耕作されてゐる土地からは五〇プード、年期小作地からは四五プードの收獲があつた。) 地主經營の雇役制度とともに、信じ難きほど幼稚な農業方法が維持されてをり、農業術にも公共生活全體にも野蠻狀態が永續してゐる。あらゆる種類の雇役を根絶するなら、即ち地主貴族的土地所有全部を (しかも買戻し

の方法によらずに) 絶滅するなら、それは疑ひもなく農業術の高上を意味する。

從つて、農村問題と農村危機との本質は、農業術の高上を妨げる一切のものを取り除くことにあるのではなく、如何なる樣式で右の障碍物が取り除かれるか、如何なる階級によつて、且つ如何なる方法を以てこの取り除きが實行されるかといふ點に存するのである。土地生產力の發展の障碍物を取り除くことは、回避することはできぬ。しかもそれは主觀的な意味においてのみならず客觀的にもそうである。換言すれば、この障碍の除去は不可避的なものであつて、如何なる權力と雖もそれを防止することはできないのである。

シャーギン氏の誤謬は——それは獨り氏のみではなく、他の大多數の著作家も農村問題を取扱ふに當つて犯してゐる誤謬であるが——農業技術を高めねばならぬといふ、それ自體では正當な形勢を、あまりに抽象的に考へて、ロシア農業の中に資本主義的特徴と農奴地主的特徴とが交錯してゐる一種獨特の形態に對して

何等の考慮も拂つてゐない點にある。ロシア農業における生産力發展の根本的障碍物としては、第一に雇役及び賦役、次いで農奴地主的貢税、農民の權利の不平等、上流社會に對する農民の家臣關係といふような、農奴制度の遺物を擧げることができる。こういふ農奴地主的遺物を取り除くことは、既に久しく經濟的要求となつてをり、十九世紀末に農業上の危機が極度に激烈になつたのは、ひとへに一切の中世的遺物からの解放行程が延ばされて、雇役と賦役とが餘りに永く「息の根をつゞけて」ゐたために外ならぬ。一八六一年以來その苦悶が餘りに長期間繼續した結果、今や新しい有機體のために一切の農奴地主的なものを大急ぎで一掃するために、强力的方法が必要となつたのである。

ロシア農業のこの新有機體は、一體どういふ風のものだらうか？　吾々が今までの叙述で、この點を特に詳細に說明しようとつとめてきたのは、特に自由主義ナロードニキ派の經濟學著述家が、この點について間違つた觀念を抱いてゐるか

らである。新しい經濟的有機體は、吾々の見るところでは、農奴地主制度の殼の中から拔け出してくるものであつて、それこそは、市場に適合するように針路を向けてゐる農業であり、資本主義である。地主經營は、分有地農民の雇役と賦役とを基礎としないかぎり、明瞭な資本主義的特徵を現はしてゐる。農民經營もまた、吾々がミールの背後を覗くことを知り、分有地の公けの平等分割が實際上はどんな狀態にあるかを認めるかぎり、同じくいたるところに純粹な資本主義的特徵を示してゐる。ロシアにおける農業は、一切の障碍物にも拘はらず、間斷なく益々市場の方へ針路を向けてをり、且つこの指針は不可避的に資本主義に導くものである。尤も農業が變化する形態は極度に多種多樣のものであつて、各地域によつてそれぞれ異つた假面を被つてはゐるが。

どういふ方法で中世的の殼が强力的に打ち破られ、どういふ風にそれが、新經濟有機體の一層の自由發展にとつて必要なものとなつたか？　中世的の土地所有

關係が破毀されるといふ方法によつてゞある。今日までロシアでは、地主經營も、また多分に農民經營も、依然として中世的である。既に見た通りに、新經濟條件は、貧農をして分有地と馬とを手離すようにさせ、富農に對しては、分有權や地主貴族からの土地購入及び借地などの種々の形で併合した土地を以て、比較的大規模な經營を行ふようにさせ、それによつて土地所有關係の中世的桎梏を破壞する。土地が特に雇役や年期小作や自作なんかに分割されてゐる地主地にあつても、新經濟制度が、舊い中世的土地所有關係の外部に發生してゐるのを見る。

こういふ土地所有關係は、斷乎として舊いものと斷絶することによつて、一擊のもとに絶滅することができる。土地國有はこの種の方策である。この方策は一九〇五—一九〇七年の期間に、あらゆる農民代表者によつて多少とも徹底的に要求されたものである。土地私有の廢止は、市場的に且つ資本主義的に針路を向けてゐる農業が據つて立つブルジョア的基礎に、微動だも與へるものではない。土

地國有なるものが、社會主義または土地の平等使用といふようなものと關係があるといふ見解ほど間違つたものはない。社會主義はと云へば、それは市場に向つて進む經濟を廢止するものたることは、分かり切つたことである。これに反して、土地國有は、土地を國家の所有に委轉することであつて、この委轉は、國有になつた土地での私經濟的經營を何等妨げるものではない。土地が國全體の、國民全體の所有または「財産」になつたと宣言したところで、それによつて、その土地での經濟の仕組みが些かも變化しないのは、たとへば、富農が土地を「永久に」購入するか、地主貴族或は皇室から借地するか、それとも驅逐された貧農の分有地を「蒐める」かによつて、その富農の經濟の(資本主義的)仕組みが一向變化しないのと同じことである。商品市場が存立する限り、社會主義を云々することは笑ふべきことである。農産物を生産要具と交換することは、土地所有の形態と全然關係のないことである。(注意しておくが、私はこゝでは土地國有の經濟的意義を敷衍す

るつもりはなく、またこれを綱領として擁護するつもりもない。この方面の仕事は前記の著作の中で果しておいた。)

平等分割について云へば、分有地の分配に當つて、平等分割がどういふ具合になつてゐるかといふことは、既に前に説明しておいた通りである。既説の如く、分有地はミール内部では幾分平等に分配されてゐて、富者はホンの少し餘計に土地を獲るに過ぎぬ。しかし貧者がその土地を手離し、富者が借地を一手に集中するので、右の平等分割の結果は殆んど無に等しいものである。およそ農民の間に財産の相違があり、交換制度が支配してこの相違を益々強める限りは、如何なる土地所有の平等分割も、土地使用の不平等を廢棄し得ないことは明かである。

土地國有の經濟的意義は、人々が普通に着眼してゐるところには全然存在してをらぬ。それはブルジョア的關係に對する闘爭の結果ではなく(國有なるものは、マルクスが既に既に證明してゐるように、最も徹底的なブルジョア的方策である)

實にそれは農奴地主的關係に對する闘爭の間に實現されるものである。中世的土地所有關係の蕪雜な狀態は經濟的進歩を阻止する。身分上の制限は商品流通を妨害する。即ちラチフンヂウムを有する地主貴族は雇役制度を引續き存續させようとする。舊土地所有關係が新經濟に並行してをらぬところから、鋭い對立が生れるし、分有地をもつた農民は追込みの中に押しこめられ、その狹隘な枠を實生活が一歩一歩破壞してゐる。土地國有は、土地所有關係から一切の中世的なものをすら〳〵と押しのけ、土地所有に對する一切の人爲的制限を無くして、土地を自由なものにする。自由なものに? 誰のために? あらゆる市民のために? 斷じて否。馬をもたぬ農民(實に三百二十萬戸以上)の自由は、既述の通り、自分の分有地を手離し得る自由に外ならぬ。一般には經濟の、特別には世界市場の、近代的條件が要求する通りに土地を耕作しようとし、且つ事實耕作することのできる農業主のためにこそ、土地が自由なものになるのである。土地の國有は、農奴

地主制度の死滅を促し、一切の中世的汚物から淨められた土地の上に、純粋にブルジョア的な農業企業者團の發達を促進するだらう。こゝに、十九世紀末のロシアにおける土地國有の歴史的意義がある。

資本主義のために土地所有關係を淨める方法のうちで、客觀的に實行不可能ではない第二の方法は、前述の通り、富農によるミールの横奪を促進し、富農の土地私有權を確立することである。この場合、地主貴族的ラチフンヂウムは存續するのであるから、雇役並びに賦役の主要基礎は、手を觸れられずに依然として存續する。資本主義のために路を拓くこの方法が、生産力の自由發展を保證する度合は、第一の方法とは比較にならぬほど僅少なものであることは明白である。ひとたびラチフンヂウムが維持されるとなれば、農民階級の賦役や、イスポルシュチナ制度や、年期小作や、雇役制度や、農民自身の農具を以てする「旦那樣」の土地の耕作などもまた、無條件的に維持されることになる。即ち、いみじくも家長

的田舍風と呼ばれてゐるアジア的野蠻狀態と共に、おくれたまゝの文化が維持されるわけである。

ブルジョア的に發展しつゝあるロシアにおける、上記二種の農村問題「解決」方法は、農業における資本主義の兩つの發展經路に照合する。私はこれを、プロシヤ式經路およびアメリカ式經路と名づける。前者の特徴は、中世的の土地所有關係が一擧に清算されずに、漸次に資本主義に適應するようにされ、從つてこの半封建的持徴が相當久しく効力を有する點にある。ブルジョア革命はプロシヤの地主貴族的土地所有を粉碎せずに、これを上方から地均らしをし、かくて地主貴族的土地所有が「ユンケル」(一八)經濟の基礎となつた。それは本質から言へば資本主義的なものではあるが、しかし「家丁條令」(一九)等の方法によつて、村民を或る意味で隷屬させないではやつていけないものである。一八四八年以後數十年間持續したユンケルの社會的および政治的支配もまた、これを基礎とするものであり、

農業における生産力の發展が、ドイツではアメリカとは比較にならぬほど緩漫だつたのもまたそのためであつた。蓋しアメリカでは、資本主義農業經濟の基礎を成すものは、大地主の舊い奴隷經濟ではなく（南北戰爭は奴隷使用の地主經營を粉碎してしまつた）、自由な土地での自由な農業企業者（ファーマー）の自由な經營――一方、一切の中世的なもの、農奴制度と封建制度とから自由な、他方、土地私有權からも自由な――であつた。アメリカでは土地は、その國の巨大な土地貯藏から名目だけの價格で讓渡され、かくして始めて全然資本主義的な新しい基礎の上に土地私有權が發展して來たのである。

資本主義發展の右の兩つの經路は、ロシアでは一八六一年以後明瞭に認めることができる。地主貴族經營の進歩は疑ひの餘地がない、但しこの場合、右の進歩の緩漫は、偶然なものではなく、農奴地主制度の殘物が維持されてゐる限りは不可避的なものである。しかし同時に、農民社會が自由に發展すればするほど、農

奴制度の遺物に壓迫されることが少ければ少ないほど（例へば南部ではこういふ一切の好都合な條件が存在してゐる）、そして最後に、大體において土地の配給がよくなればなるほど、農民社會の分裂は益々烈しくなつて、土地企業家とファーマーの階級が發生することもまた、疑ひを容れぬ事實である。たゞわが國の發展の將來において問題となることは、右の兩つの發展經路のうち孰れが勢力を占めるか、それにつれて生ずる必然的、不可避的な社會變形に際して、どの階級が寵兒となるだらうか――御情け深い昔の旦那樣と地主樣か、それとも自由な農民とファーマーか――といふことだけである。

吾々の間でも、土地が國有となると共に、土地は商品流通の圏外におかれるだらうと考へてゐる人も稀れではない。農民社會の先驅者や思想家は、無條件的にこの見地に立つてゐる。しかしこういふ見方は全然間違つたものである。この正反對が正しいのである。土地私有權は、土地に對する資本の自由な流入にとつて

一の障碍物である。從つて國家から自由に借地する場合（そしてブルジョア社會における土地國有は、その本質上勢ひそうなるのである）、土地は土地私有權の支配の下にあるよりも、一層強く商品流通の中に引き込まれる。土地に對する資本の流入と農業における競爭とは、自由借地の場合は土地私有の場合よりも遙かに無拘束なものである。土地の國有は、謂はゞ地主なしの地主制度（ランドローディズム）である。そしてこの地主制度が農業の資本主義的發達に對して有する意義については、マルクスが『剩餘價値說史』の中で深刻な判斷を下してゐる。私は農村綱領に關する前掲書の中で、このマルクスの思想を說明しておいたが、問題の重大さに鑑みて、それを玆でもう一度繰り返したいと思ふ。

リカード地代說の歷史的條件に關する一章の中で（『剩餘價値說史』第二卷、第二部）、マルクスはこう云つてゐる。リカードとアンダーソンとは「大陸では非常に奇異に思はれるような見方から出發してゐる。」即ち彼れ等は、「土地に對する

資本の流入を妨げるような土地所有は存在しない」ことを前提としてゐる。これは一見すれば矛盾であるらしく見える。何故なら、外ならぬイギリスで、封建的土地所有が殊に明白に維持されてゐるように考へられるから。しかしマルクスは言ふ、まさにイギリスにおいてこそ、資本は「世界中のどの國よりも容赦なく、傳統的土地所有條令を一掃してしまつた。」この點でイギリスは「世界で最も革命的な國」だと云へる。「農村における資本主義的生產の諸條件に矛盾し、又は適應しない場合は、歷史的に傳承された一切の關係が、村落團體の狀態のみならず村落團體そのもの、農村民の住所のみならず農村民そのもの、耕作の本來的中心のみならずその耕作そのものが、容赦なく一掃されてゐる。例へばドイツ人なら、經濟關係が、マルク（二〇）の傳統的事情や、經營中心の狀態や、住民の一定の聚落によつて制約されてゐるのを見出すが、イギリス人は、農業術の史的條件が、十五世紀末以來、資本によつて段々進步的にされてきてゐるのを目擊してゐる。聯合王

國で使はれてゐる「クリヤリング・オヴ・エステーツ」(二一)〔領地開放〕といふ術語は、大陸諸國には見當らないものである。ところで、この「クリヤリング・オヴ・エステーツ」とは何を意味するか？　それは、容赦なく居住民を驅逐し、現存の村落團體を一掃し、農業建物を破壞し、耕地から牧場といふ風に農業の種別を一擧に變形させて、およそ一切の生產條件が、傳統的なまゝに受けとられずに、その時の事情の下において資本の投下に最も有利な狀態にあるように、歷史的にそうなることを意味する。從つて、その限りでは土地所有なるものは存在せず、それは資本――借地農業者――をして自由に經營させる。蓋し彼れにとつては、貨幣收益だけが主眼だからである。從つて、祖先傳來の共有耕地や、經營中心や、農業講中を頭の中においてゐるポメルンの地主は、リカードが農業關係の發展について懷いてゐるような「非歷史的な」見解を聞けば、喫驚仰天するかも知れぬ。しかしこの地主は、それによつて、ポメルンの事情とイギリスの事情とを無邪氣に取りちが

へてゐるに過ぎぬことを示してゐるのみである。しかし、それだからと云つて、この場合、イギリスの事情を出發點としてゐるリカードは、ポメルンの事情だけの範圍內で考へてゐるポメルン地主と同樣に狹量だとは云へない。イギリスの事情は、近代的土地所有が、換言すれば、資本制生產によつて制約された土地所有が、妥當に發展した唯一のものである。この場合、イギリス的見方は、近代的な、資本主義的な生產方法にとつて模範的なものである。」

イギリスでは、農民的土地所有關係が强力的に破壞されたことによつて、右の土地掃除が革命的な形の下に行はれた。壽命を生きつくした舊時代のものとの斷絕は、ロシアでもまた避けることはできぬ。しかしながら、如何なる階級が、そして如何なる形で、吾々にとつて不可避的なこの斷絕を實行すべきかといふ問題を、十九世紀(乃至は二十世紀の最初の七年)は、まだ解決してゐなかつた。今日ロシアで土地がどんな風に分配されてゐるかといふことは、既に述べた通りであ

る。即ち七千五百萬デシャチンの土地を有する千五十萬の農家が、七千萬デシャチンの土地を擁する三萬のラチフンヂウム地主に對立してゐるのだ。所詮こういふ事態の下では、無條件的に鬪爭の火蓋が切られるに相違ないが、一方その鬪爭は、一千萬農家の土地所有が約二倍になり、上層三萬人の土地所有が消滅するような具合に終末を告げることもできるのである。そこで先づ、右のような鬪爭の可能的終末を、純理論的に、即ち十九世紀末にロシアに農村問題が發展してきた傾向の上に立つて考察しよう。

この變革の結果は、如何なるものでなければならぬか？　土地所有關係について云へば、中世的な土地分有と中世的な地主貴族的土地所有とは、明かに整理されるに相違ない。舊時代のものは一掃されるに相違ない。土地所有關係には、些かの傳統の痕跡も殘るまい。ところで、こういふ新たな土地所有關係は、何によつて規定されるだらうか？　平等分割の「原則」によつて？　ナロードニキ流の思

想に浸み込んでゐる進歩的農民は、そう考へ勝ちである。ナロードニキはそう考へてゐる。しかしそれは一の幻想である。法律で認められ、習慣によつて神聖化された、ミールにおける平等分割の「原則」なるものは、實際上には、土地所有が富の度合に應ずるような結果に導いてゐるではないか。そして吾々は、ロシアの統計によつても、西ヨーロッパの統計によつても、等しく、幾千回となく確證されてゐる右の經濟的事實を基礎として、次ぎのように斷言することができる。平等分割に對する希望は、幻想となつて消えてしまふだらう、そして諸々の土地所有關係の融合が唯一の結果として殘るだらう。こういふ結果は重大な意義のあるものだらうか？　非常に重大なものである。何故なら、どんな改良も、どんな改造も、ロシアにおける農業技術の最も急速な、最も廣汎な、最も自由な進歩に對して、並びに農奴地主制度や身分制度やアジア主義がわが社會生活から消滅することに對して、右に述べた結果ほどに完全な保證を與へ得るものではないからで

ある。

技術の進歩のため？　と問ふ人があるかも知れぬ。飼草の栽培や、機械の使用や、土地の施肥や、家畜數などに關する限りは、地主經營は農民經營よりも高級なものであることは、精密な資料によつて既に明白に證明されてゐることではないか！　そうだ、それは證明されてゐる、そしてこの事實は疑ひの餘地がないことだ。しかし同時に、經營組織や技術その他における相違は、打つて一丸となつて收獲高の中にその總果を現はすことを忘れてはならぬ。ところが既に述べたように、イスポルシュチナ制度またはその他の雇役制度の下にある農民の場合の地主地の收獲高は、分有地のそれよりも尠ないのである。ところが、ロシアにおける地主經營と農民經營の農業術の水準を問題とする場合には、こういふ狀態は十中八九は忘却されてゐるのだ！　地主經營は、資本主義的に行はれゝば行はれるほど高級なものとなる。ところが賦役農夫が今尙ほ依然として祖先傳來の農具や、

時代後れの方法などで、地主地を耕作すればするほど、地主貴族的土地所有は益々停滯の主因となるのだ。こゝで考察してゐる土地所有關係の變化は、イスポルシュチナ式經營地や借地の收獲高をも增加するに相違ない（現在のところでは右兩者の收獲高は、分有地の五四ブード、地主農經營の六六ブードに對して、それぞれ五〇ブード、四〇ブードである。精密な數字については前を見よ。）ところで右の收穫高が、假りに分有地の收穫高の程度まで增したとしても、それだけでも既に非常な進歩をしたことになる。しかしまた、農民社會が農奴地主的ラチフンヂウムの桎梏から解放されるなら、或はまた、分有地が他の一切の土地と同じに自由なものとなつて、平等に開放されることになれば（開放と云つても、一切の市民に對してゞはなく、農業資本を有する市民、即ち農業企業家だけに對してだが）、その結果は、均しく分有地の收穫高もまた增加することは云ふまでもない。

こういふ結論は、これまで引用してきた收穫高に關する統計からのみ生れるも

のではない。反對に、吾々はこの結論を例證するために、右の統計を引用してきたのに過ぎぬ。實にこの結論は、ロシアの地主貴族的および農民的經營の進化に關する一切の統計資料の總體から生まれるものである。この結論に反對することは、やがて、十九世紀後半におけるロシア農業の歴史は、農奴地主的生産關係がブルジョア的生産關係に變化する歴史だといふ事實に反對することになる。

現時の農民經營の總數に關する統計を執つて考へれば、吾々の研究してきた農村再組織は、土地所有の極度の細分に導くかのような印象を受げるかも知れぬ。あらうことか、二億八千万デシャチンの土地に千三百萬の農家！ 途方もない分散ではないか？ これに對して吾々はこう答へる、――まさに現在でも、吾々はこういふ無際限の分散狀態を目擊することができるのだ、何故なら、現在でも千三百萬の農家が、現に二億八千萬デシャチン以下の地面で經營してゐるのだから。從つて、こゝで吾々が問題としてゐる變革は、この點では、斷じてより惡い狀態を招

來するものではない。それだけではない。吾々は更に進んで問ひたい、――こういふ變革に際して、農家の總數が從來と同一數にとゞまると考へるのは正當だろうか？ ナロードニキの理論の影響で、又はありとあらゆる期待を土地に懸けて、工業勞働者が小農業主になることをすら夢想し得るような農民の意見の影響で、普通にはそう考へられてゐる。十九世紀末におけるロシア工業勞働者の一部もまた、疑ひもなくこういふ農民と同じ見地に立つてゐる。しかし、こういふ見地が正しいかどうかは疑問である。およそ右の見地は、客觀的な經濟的諸條件と經濟的發展の進程とに照合するものだろうか？ 農民は、衰頽して再現することのできぬ過去のものを土臺としてゐて、生れつゝある未來のものを土臺としてゐないことを認めるには、たゞ右の質問を發すれば充分である。農民は後向きになつてゐるのだ。農民の見方は昨日の思想だ。實際上では、經濟的發展は、農業人口の增加でなく、減少に導くのである。

右に考察してきたような土地所有關係の變革は、農業人口の減少の行程を廢止するものではない、且つまた決して廢止し得るものではない。「農業人口の減少の行程は、資本主義が發展しつゝあるあらゆる國に共通なものだからである。誰にでも土地獲得の權利が與へられるのだから、右の變革は、農村人口の減少を來たすわけはないではないかと云ふ人があるかも知れぬ！　この質問に對しては、一農民議員チシェフスキー氏（ポルタワ縣選出）の議會演說の引用を以て答へよう。一九〇六年五月二十四日の議會で、氏はこう言つてゐる、『余を選出して茲に送つた農民は、例へば次ぎのような計算を試みた、「吾々が幾分金持ちになつて、それぞれ一家が年に五ルーブルから六ルーブルを砂糖のために費やすことができるとすれば、甜菜栽培で引き合つてゐる區域には、どこにでも、現在の外に尙ほ二三の製糖工場が生まれることだろう。」　こういふ工場が發生する結果、多數の働き手が農業の中から要求されるのは當然のことである。そして農業の集約が行はれ

る場合は、どんなに多數に上ることだろう！　一方、また、製糖工場の生產も增加するに相違ない云々。』

右は鄕土で政治上の活動をしてゐる人間の、實に特徵的な告白である。彼れに對して一般的な農村變化に關する意見を求めるとすれば、おそらくはナロードニキ風の見解を發表するに相違ない。しかし「意見」でなく、改造の具體的結果を問題とするとなると、資本主義的眞理が即座にナロードニキ的空想を征服してしまふ。蓋し、農民が、代表者のチシェフスキー氏に向つて言つたことは、とりも直さず一の資本主義的眞理、卒直な資本主義的眞理だからである。小農業主の大衆團の地位が、少しでも目に見えて改善される每に、實際、製糖工場數とその生產力とは著しく增加するに相違ない。そしてまた、甜糖生產ばかりではなく、加工工業のあらゆる部門、纖維工業、鐵細工業、造機工業、及び建築業その他もまた强烈な刺激を受けて、多數の人手を必要とするようになるだらう。こういふ經濟

的必然は、平等分割に對するあらゆる美しい希望や夢想などよりも力強いものであることが分かる。馬をもたぬ三百二十餘萬の農家は、どんな農村再組織の場合でも、どんなに土地所有關係に變動があつても、どんな「土地配賦」の場合でも、斷じて「經營者」に變ずるものではない。この數百萬の農家（これに加ふるに尙ほ馬一頭を有する同數の農家）は、既述の如く、一塊の地面の上に齷齪と働らいて自分の持分を手離してしまふ。おそらくアメリカ式の工業發展は、資本主義社會では絕望的なこの農民の多數を、即座に農業から外へ引張り出すに相違ない。そして如何なる「土地をもつ權利」も、それを阻止する力はないだらう。此の上なく慘じめな、ボロ〳〵の時代後れの農具で、自分の割當地や、御情け深い旦那樣の土地をほじくつてゐる千三百萬の農夫は、今日尙ほ、一の嚴然たる實在である。それは農業における一の人爲的な過剩人口である。それは既に久しい以前に壽命を終つた農奴地主的關係が、强權を以て維持されてをり、死刑、銃殺、刑罰遠征

等がなかつたなら、これを支えては行けなかつたといふ意味で、まさしく人爲的である。大衆の地位が少しでも目に見えて改善され、封建的遺物に對して、少しでも眞劍な打擊が加へられるなら、その結果は立ちどころに農村の過剩人口が姿を消し、農業から工業に注ぐ人口流入の行程が非常に大規模になり（現在ではまだ小規模だ）、農家數が千三百萬から極少數に低下し、ロシアは、現在のように支那式でなく、アメリカ式に前進するに相違ない。

十九世紀末におけるロシアの農村問題は、諸支配階級に對して次ぎの問題の解決を課した。——即ち、それは、舊來の農奴地主制度の息の根をとめ、土地所有關係を淨めて、資本主義のために道を拓くことである。次いで階級鬪爭は、この課題がどんなる階級鬪爭のために、生產力の高上のために、そして自由且つ公然たる具合に解かれるかを決定するのである。

譯註

(一) ロシアでは一八六一年の謂はゆる農奴解放までは、貴族にのみ土地を與へられ、市民私有は許されなかつた。農奴解放後は、少しづゝ企業家の土地所有の發生を見たが、それでも土地の最大部分は、依然として中世領主の子孫たる貴族の世襲地であつた。ロシア貴族は悉く巨大地所の所有者であつて、彼等は一九一七年の革命までは、あらゆる國家機關を獨占してゐたのである。

(二) 一八六一年の農奴解放令によつて、農民は、從來農奴として地主から用益を許されてゐた土地を賦與された。しかしそれは各個農民に對してゞなく、一括して農民團體(ミール)に對して賦與されたのである。從つてその土地は農民團體の所有であるが、その團體員たる農民各自はその土地を平等に分割して用益した。そして農民は自已の用益地を、時を經ると共に賣入れしたり賣買したりするようになつた。從つてこの土地の形は、純粹な形での共有ではなく、個人的私有への過渡的形態を成すものであつた。この意味でそれは『分有地』と呼ばれ得るのである。

(三) ラチフンヂウムとは、本來は古代ローマに發達した莊園の謂ひであるが、一般に中世的な巨大な土地所有を意味するものである。

(四) および(五) 中世ロシアの土地所有は、(イ) 國有地、(ロ) 御料地、(ハ) 莊園、(ニ) 寺院領の四種に分れてゐた。國有地農奴および莊園農奴とは、各々國有地および莊園に隷屬してゐた農民の謂ひである。

(六) 中世にロシアに移住して農耕に從事したドイツ人の子孫であつて、中露、南露の諸州に部落を造つてゐた。

(七) 一八六一年の農奴解放令は、從來の用益地を農民に賦與したが、それは無償で與へたのではなく、農民は用益地を純粋に自己の私用とするためには、土地賠償令によつて、四十九箇年賦で賠償金を支拂つて、その土地を「買戻し」しなければならぬ規定であつた。賠償金の金額は、當時の納貢額を一定の利率で還元したものであるが、その利率は農奴の種類によつてそれぞれ異つてゐた。

(八) 一九一七年革命まで存續してゐた地方自治議會。もちろんそれに附與された自治權は制限的なものであり、選擧もまた單に名目的なものに過ぎなかつた。

(九) 一八六〇年代に農民の自由を要求して起つた急進知識分子の運動であつて、一八六二年に組織された「土地と自由」結社、七九年に組織された「人民の意志」黨、その後身である「社會革命」黨は、皆このナロードニキ思想を代表するものである。この一派はロシアに存在する村落共同體(ミール)の制度をスラヴ民族特有の制度であると考へ、ロシアは西歐におけるような資本主義の段階を通過せずに、ミー

ル制度の基礎の上に直ちに社會主義社會が實現し得ると信じてゐた。

(一〇) ロシアにおける村落共同體。農奴制度發生以後のミールの特徴は、土地の用益を共同にし、租稅及び貢納に對して連帶責任を負ひ、用益地の定期割替を行ふことであつた。ミールには一定の自治權が與へられてゐた。當時の支配階級にとつては、農民を一括して追ひ込みの中に入れて置く方が都合がよかつたのである。しかし木文にも說いてある通り、この中世的ミールの中にも資本主義が侵入してきて、廿世紀に入つて事實上共同體を崩解させてしまつた。

(一一) 謂はゆるアレキサンダー二世の農奴解放。この解放によつて農民は、農奴地主に對する人格的隷屬から解き放たれ、自由に賃銀勞働者に身を落すことのできる基礎を與へられた。解放令は農民に對して、從來用益してゐた土地を與へることを規定したが、この土地は、農民各自に對して私有地として分與されたのでなく、共有地としてミール團體に分與されたのである、但しミールはこれに對して、半世紀の間年賦によつて賠償金を支拂はればならなかつた。その金額ははるかに地價を超過した苛酷なもの、あつた。即ち 農民團體は土地の「買戻し」をしなければならなかつたのである。そして賦與された土地面積は非常に僅少なものであり、且つその地質も劣等であつた。そこで農民が一家の生活を維持してゆくためには、どうしても舊農奴主の地面を小作しなければならぬ仕掛けになつてゐたの

である。

（一二）農奴解放令によつて地主地から農民に賦與された土地。

（一三）Abarbeitungを假りに譯す。

（一四）ミール中の富農。こゝに、ミール員に土地用金權を擔保にして高利の資金を貸付け、富農を利用して土地を集めて富農に成り上つた者に對する俗稱。

（一五）このストリピンの農村改革案は、一九〇六年十一月の勅令となつて現はれた。改革案の主眼は、農民に土地賣買權を正式に認めて、ミール內の富農をして自由に土地を併呑せしめ、崩解しつゝあつたミールに最後の打擊を加へるにあつた。この改革案は、社會民主黨および社會革命黨の激烈な反對を受けて、再度國會を解散したのち、一九一〇年六月に法律となつて實現した。

（一六）農奴が土地用金の代償として地主に支拂ふ貢稅。

（一七）勞働黨。一九〇五年第一國會選出議員中の勞働者代表議員によつて組織された。

（一八）ドイツの中世的地主貴族。

（一九）ドイツ諸州において、農奴制度の廢止と共に十九世紀初頭に發布された條令であつて、地主と家丁の間の關係を規定したものである。家丁は主人の家に住み込み、主人に人身的に隸屬して農耕および家內勞働に從はねばならぬ。（この條令は一九一八年十一月の革命と共に廢止された。）

（二〇）ドイツにおける村落共同體の共有地。

（二一）Clearing of estates. 十七世紀から十八世紀末にかけて、イギリス、スコットランドにおいて盛んに行はれたものである。領主は領地より住民を暴力的に排斥驅逐して、これを牧場および獵場と化した。

大正十三年六月十六日印刷
大正十三年六月十九日發行

【定價壹圓五拾錢】

レーニン著
資本主義展開期における
農村問題

檢印
大木

飜譯者　大木陽一郎

發行者　東京府豐多摩郡代々幡町幡ヶ谷三四
　　市川義雄

印刷者　京東市小石川區上富坂町二十五番地
　　野田彌

發行所　東京市外代々幡町幡ヶ谷三四
　　振替東京六七五九一番　希望閣

發賣所　東京市麹町區飯田町二ノ六八　文雅堂

ハエ4V
-13

ニコライ・レニン

資本主義最後の階段としての

帝國主義

青野季吉譯

レニンは本書に於て、ブルジョア學者の告白とブルジョア統計の報告とを用ゐて資本主義最後の階段としての帝國主義の本質を闡明し、社會主義經濟への進化の必然性を說いてゐる。科學者としてのレニン、マルクス主義理論家としてのレニンの價値が最もよく發揮されてゐるのは本書である。本書によつて始めて吾人は現代國家の經濟的基礎と、國家鬪爭の歷史的意義とを、明確に識ることができる。

定價金二圓　希望閣刊　送料十八錢

終